
俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

ふいおんふいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が理想の主人公 - 魔術と科学編 -

【Nコード】

N9247Z

【作者名】

ふぉんふぉん

【あらすじ】

他人を庇ってテンプレ的に死んでしまった主人公が、テンプレ的に神っぽいやつに会って、テンプレ的に転生、憑依、などするお話。

転成、憑依するにあたって主人公は力をもらった。

そしてもらった力とともに様々な世界を生きていく物語。

自己解釈、ご都合主義などの要素があります。

当作品はその第一世界です。

プロローグ

「やっとここまで来たか。いやゝ長かった、ホントーに長かった。はあ…」

その少年はそんな言葉とともに溜め息を吐いた。

溜め息はいままでの苦勞を語るかのように深く、重いものであった。

「でも、ようやく始まるんだよな。」

そのように独り言をつぶやく少年がいるのは「学園都市」と呼ばれる場所である。

「学園都市」とは人口東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。

そしてその8割は学生によって構成されている。

外周は高さ5m・厚さ3mの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

「ここでどんなふうにやっていこうかな。並行世界というからにはあいつに言われたとおりには違いはあるんだろうけど…まあ、そんなことは今はいいか。」

少年からつぶやかれた「並行世界」という単語が、この少年が普通でないことを物語っている。

「それにあいつもいつてたしな、楽しんで欲しいって…」

あいつというのどこか遠い所にいる人物というよりは、もっと別の何かを感じさせるような口ぶりであった。

「…まあ、こんなことごちゃごちゃ考えてたら楽しめるものも楽しめないよな。やっぱ自分が思うままに過ごさないと…」

そうつぶやくと少年は学園都市の町を歩き始めた。

その表情にはこれからへ期待のためか、満面の笑みであった。

この少年、旧名、日野井^{ひのい} 慶^{けい}は新しい道を進み出した。
これからの未来に胸躍らせながら…上条当麻として。

プロローグ（後書き）

初めまして、ふぉんふぉんと申します。

いままでは作品を見る側だったのですが、今回、自分の作品を投稿させていただきました。こんな駄文でも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、今回はプロローグということで結構短めにいたしました。

ですがこれはこの作品の導入ということで主人公がこのようになつたあらすじを次回、プロローグ2という形で投稿したいとをもちます。

このあとの続くもなるべく早く投稿いたしますので今後とも宜しくお願いします。

プロローグ2

side：当麻（慶）

やあ皆さんどうも。わたくしは旧名、日野井（日野井） 慶^{けい}こと
現在は上条当麻と申します。

自分この世界に来てから15年、ようやく学園都市に來ることが
できたわけです。

これまでのことを思い返してみると、いろいろ苦労したな〜と思
います。

なにがあつたかと言いますと右手が原因で発生する不幸の数々。
同年代のやつからはいじめのような物を受け、その親たちからも
軽蔑の視線を受け、その他にも数えきれないほどの嫌がらせを…と
いう具合に本当にろくなことがなかった。

だがそれもここに來たことで無くなる。なぜならこの学園都市は異^{アブノーマル}
常こそ普通だからだ。

アブノーマル万歳！！最高？？……

……調子こいてすみませんでした。

さて、そんなことはとりあえず一旦 SO・GE・BU しておいきましよう。

ところで、画面の前の皆様にはなぜわたくしが上条当麻になっているか説明してませんでした。

サーセン。

というわけでここで一度、回想をした方がいいんじゃないかなろうかと思います。

え？そんなのめんどくさい？プロローグ二回もやってんじゃないって？

ハッ、いいぜ、お前らが回想も見ずに本編を読もつてゆーなら、

まずは、その幻想をぶち殺す！！！！！！

はい、つーわけで回想です…

…
…
…
…

「あれ、ここどこだ？」

俺が気がつくとそのへにも見覚えのない場所だった。
周りを見渡しても白一色。上下前後左右、すべてが真っ白。

というか、こんなとこに見覚えのあるやつなんかいないんじゃないかな
いかとすら考えてしまうほどだ。

「でもなんでこんなとこにいるんだ？」

それが疑問だった。

だからここで自分の最後の記憶をおもいかえしてみると…

…？そうだった！俺は確か工事現場の近くを歩いていて、そしたら
突然上からガシャン？という大きな物音とともに鉄骨の雨が降って
きたんだ！

でもそれは俺に当たる軌道じゃなくて俺の前方にいる女性に当た
りそうだったんだ。

そして、危ない？って思った時にはもう体が動いていた。

俺は女性を突き飛ばし、代わりに自分が鉄骨の下敷きになった…はず？

でも俺には意識があるし助かったのか？

仮に助かったとしたらここは…

「…病院、なのか？」

いやそんな分けないと思い直す。

普通に考えて鉄骨に下敷きにされて生きてる訳がない。ほぼ確実にだ。

だがそれだと自分に意識がある説明がつかない。それじゃあ何だ？
と思っっていると…

「お主はあのまま死んでたよ」

声が聞こえた。

それと同時に、ああ、このパターンはもしかして、とも思った。

声が聞こえた方向に振り返ると、俺の予想を肯定するかのよう
いかにも神って感じの爺さんと女神って感じの美人がいた。

「あんだ、神ってやつか？」

「うむ、因みに名前はゼウスという」

「ふうん、んじゃあその神様がこの場所に俺を連れてきたんだろ

「俺に何のようだ？」

「お主にはな、転生をしてもらおうとおもってな。」

やっぱりこうなるか。

「というか死んで、訳のわからないところにいて、神っばいやつに会ったら転生だよな。」

テンプレだなテンプレ。

「でも何で俺なんだ？他にも人間なんかいろいろいるだろ？」

「それについてはな、お主はあの時に近くに居たやつを庇って死んだでそやつがたまにいろいろと調査のために下界に行っていた神だったのじゃよ。」

「神じゃったら別に鉄骨に下敷きになる程度じゃ死にやせんのじゃが、そのままじゃとちと不憫に思ってたの、転生させてやろうということになったのじゃよ。」

「ってことは俺はあれか、無・駄・死・につてやつか？」

「うわ〜ないわ〜orz」

「あ、あの……」

俺が思わずorzになっていると声がかけられる。

そちらの方を地に手をついたままに見上げると神と一緒にいた女神っばい人だった。

「というかよく見てみると何処となく俺が庇った神ってやつに似て

なくもない気が…

「あの、私の不注意のせいであなただを死なせてしまつてすいませんでした！」

どうやら本人だつたらしい。

「…まあ、しょうがないですよ。起こつてしまつたことはもうどうしようもないですし気にしないでいいですよ。」

「えと…怒つてないんですか？」

「別に怒つてないですよ。」

それに女性を庇つて死ぬなんておれにとってある意味に本望みたいなもんですから。

だからそんな悲しそうな顔しないでください。

あんたは美人なんだから笑つてた方がいいですよ。（ニコ）

そして言葉とともに頭を優しく撫でてやる

「つつ！／／／はいっ／／／あ、私の名前はアテネっていきます／／」

俺の言つたことに満面の笑みとともに返事を返してくれたアテネ。たださっきと違い顔を赤らめているのはなんでだ？

「…これがニコポ、ナデポ、鈍感、天然というやつか…」

「なんか言つたか？神さん」

「いや、なにも」

神がなんか言ったような気がしたが小さくて聞き取れなかった。
なんだっただ？

「さて、では話もついたようじゃしそろそろ本題に入るとするか。
お主が転生するのは漫画やアニメの世界となるのじゃがあくまで平
行世界じゃ。なにかイレギュラーな事態が起こるやもしれん。
そこでこちらからもそれに対抗するための力なんかを授けよう。
お主に授けるのは、まあ、仮に名前を付けるとしたら『あらゆる事
を極める程度の能力』じゃな。これは主に強化と可能性に満ちた能
力でな、思考錯誤する事によってアニメなんかの技も使えるように
なったりもできる。あとこの能力により限界がなくなり極め続ける
事も可能じゃ。」

わーい、それなんてチート？

ぶっちゃけ強すぎね？もうこれで十分だろ。

…でもどうせだったら俺がもらいたかった物がもらえたらよかった
な。

俺だっていままで生きて来てこういう展開を夢見た事なんていく
らでもある。

だから自分の考えた力をもらいたかった。

「んーそうか、なら一つだけお主の考えたものを現実としてやろう。」

「あれ？こころ読まれた？いやそれよりも現実にしてやろうって、
マジで！よっしゃー？神テラ太っ腹！」

いやーめちゃくちゃ嬉しいーです！

とするとどの能力にしようかな？迷っちゃうけど…よし、アレにしよう。

「俺が望むのは名前を付けるなら

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』だ。

まあ、説明すると転生、憑依するに当たって理想の設定を着ける事ができる。

例えば、ど。えもんのび。くん転生するでしょう。の。太くんがバカなのはみんなの知ってるとおりだろう。

そこでこの能力の出番だ、もし俺がの。太くんが天才だったら？と考えた設定があるでしょう。

そして俺がこの能力をもつての。太くんに転生したら、考えた通りに天才になっているというわけだ。」

はいチートです自重はしません
サーセン。

「あいわかった。それじゃ能力を付加しよう。ぶるああああ？」

とそんな若本的な掛け声とともに俺の中で何かが変わったような気がした。

テテテテン！

というなんかLvが上がったようなBGMとともに『慶は能力を手に入れた』というのが頭に浮かんだ。

当然スルーである。

「これで能力は与えたぞ。では早速平行世界へ送らあ！ちょっとまって？」…なんじゃ？」

「行く前にあんたからもらった能力でどの程度のできるか試したいのと研究がしたいんだけど、問題ない？」

向こうに送られてからだと試す機会がなかなかなさそうだし、何より見つかったらややこしい事になりそうだから……」

「……それもそうじゃな。そういう事ならわかった。それじゃアテネ、めんどろを見てやってくれ。私は戻る。お主も次の世界、楽しんでくれ。」

「はい！よろこんで！よろしくお願いしますね、慶さん。」

「ああ、よろしく。」

：

：

：

：

……回想終了！

いや、長い回想だった。

まあ、そんな経緯があつて今の俺があるわけなんですよ。

そしてアテネとても良くめんどろを見てくれた。

ホントに2人には感謝感謝だ。

ただ、アテネがこちらを頬を赤らめてなにも考えてなさそうな目で度々見てくるから、なんなんだ？とは思っただけ。

まあそれはおいといて、研究を終えてコッチに来た時は本当に苦

労したよ。

自我のある俺に対して母乳とかオムツとかマジで恥辱以外の何も
のでもなかったよホントに。

そしてだんだん慣れていく自分が怖かった。

人間の適応能力とは恐ろしいものだ。

まあ、そんなわけで上条当麻に転生してからよつやく15年、や
つと学園都市デビューを果たしましたわけです。

これから厄介事に巻き込まれる訳だが、

A L L H A P P Y E N D ?

これを目標に日野井 慶、改め上条当麻はそげしまくる！

さて、まずはトキワに生息するLevel5の電気ネズミをゲッ
トしにいこうかな？

そんなわけで、じゃあな

ブログ2（後書き）

ブログ2少し遅くなってしまいました。すいません。

今回は書く事が多くてやや適当になってしまったかもしれません。

さて、次回は主人公設定かな？と思っております。

次回もよろしく願います。

主人公設定（前書き）

一月一日に修正

主人公設定

転生前

名前：日野井 慶ひのい けい

趣味：漫画、ラノベ、ゲーム、料理、格闘技など

好きなもの：趣味と同じ

嫌いなもの：歪んだ感情を持つやつ、卑怯の度が過ぎるやつ、人として明らかに間違ったことをするやつ

性格：普段はある程度冷静で、時々熱血さが混じってくる感じ。

周りの雰囲気に合わせてられる柔軟さもある。

その時のテンションによっても変わってくる。

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

あらゆる事に対する適性を持つ事ができ、試行錯誤する事によりあらゆる事ができるようになる。

また、あらゆる事を強化でき、強化効率も上がり上限もなくなる。
常時発動で、無意識に習得、強化している場合もあり。

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』

転生時のみ有効な能力。

簡単に言い換えると転生時にあらゆる設定を付加する能力。また
は、設定に変化する能力。

能力名は仮です

備考：身長180cm、体重70キロ、服の上からなら触れば明らかにわかるほど筋肉がついている。細マッチョ？

容姿は目が多少切れ長で前髪が若干片目にかかっている。長さは肩にかからないくらい。

イメージとしては、FFの某片翼の天使を柔らかくした感じ。

イケメンでニコポ、ナデポ、天然、鈍感を習得済み。

転生前もこのせいでいろいろあった。

さらに能力によってより拍車が掛かる。

服装は通っていた学校の制服で、制服のブレザーの下にフード付きパーカーを着ていた。

口調がその時の雰囲気や機嫌なんかによって変わる節がある。

真面目な時、ふざけてる時、普通の時

などの主に三つで変わる

真面目なのは戦闘時や重要な話を話す時やシリアスな場面などに多くで、やや鋭い感じの言葉使いになる

ふざけてるのは親しい奴らなんかと話してる時やネタを挟む時に多く、軽い感じの言葉使いになる

転生後

名前：上条当麻

趣味：同じ、不幸？

好きなもの：同じ

嫌いなもの：同じ

性格：やや上条当麻に引っぱられているところはあるが、基本的には同じ

引っぱられたことにより気だるげな雰囲気が少し出てる

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

リアルブレイカー
『現実殺し』

左手に宿る力

自然に発生する力を消し去る。

例えば、地面に触れて地面の硬度を消し去れば（0にすれば）硬度が無くなる。

だが、対象が大きすぎる場合に有効範囲がある。

主に触った部分から直径2m。

消し去る対象は任意選択。

だが自分に危害が加わりそうな時は例外的に力が発動する。

イマジンプレイカー
『幻想殺し』の対。

力に段階があり。

イマジンプレイカー
『幻想殺し』

原作の力とほぼ同じ。

リアルブレイカー
『現実殺し』の対。

力に段階あり。

備考：身長175cm、体重67キロ

筋肉的には転成前と同じ

容姿は上条当麻を主体に転生前の容姿が混じった感じ。 7：3ぐ

らの比率。

不幸スキルも合わさって、よりフラグが立つようになった。
普段の服装は原作の上条当麻と同じ様に学ランだったり、ワイシャツです。

主人公は主に幻想殺しと現実殺しを使います。 能力で習得した魔術も使いますがあまり使う事はありません。

ですが明らかに魔術というのをあまり戦闘では使わないのであって、物を創るだとか魔術かどうか判別しづらいものは頻繁に使うかも。

あと、日常生活においても使います。

口調も転生前の様にその時その時で変わってきます。

主人公は能力による適性によって習得によって氣や魔力が使えます。強化の能力によってあり得ないほどのスペックになっています。

でもそれらはリミッターを掛けて抑えています。

リミッターはミサンガみたいなアクセサリーになっていて手首に二つ付けている。

一つの効力はその世界において人間離れしないくらいまで身体能力や魔力、氣を落とす。

もう一つは魔法や、氣の操作などによりできることを制限すること。
それらを付けるのは純粹にその世界を楽しみたいと思ってるためです。

主人公設定（後書き）

次回から一話に入ります。

主人公が使える魔術については使い始めたらまた説明しようと思います。

高校入学。だから俺は寝る

ここは学園都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。そしてその8割は学生によって構成されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

学園都市というからには、やはり学校の数の凄まじいものであり、上位の学校から下位の学校まで腐るほど建っている。

ここで話は変わるが今の季節は春、しかも桜も咲いている4月の前半である。

学年が上がるものもいれば卒業して、新しい学校で勉強するものなど様々な者がいるだろう。

そして今日は春休み明けの日である。街中には新しい制服を着て、これからの学校生活に期待を持つ者、緊張してやや硬くなってる者、不安を持つ者と、進学したであろう者の表情からはそんな感情が読み取れる。

つまり今日はどの学校でも入学式が行われるのだ。

そしてここはその学園都市の学校の内の一つ。別に名門校というわけではなくどちらかといえばその逆に位置する高校だ。

そしてここにはある一人の学生が通っている。いや、正確にはこれから通い始めるのだが…。

その学生の名前は上条当麻。そう、我らが主人公である。

もちろん当麻が通っている学校でも当然のこと入学式が行なわれている。

今も新入生たちが体育館に集まり入学式を行っている最中であり、それを証明するかのようにこの学校の校長であろう禿げた人物が長々と挨拶をしている。

その長つたらしい挨拶に飽きてきたのか、体をかくんと揺らしながらも寝ずまいと必死に目を必死に開いている生徒もいる。

そんな中、当麻はというと...

「.....zzz...」

...下を向いて思いっきり寝ているのであった。

side：当麻

いやーよく寝た。清々しいくらいの快眠だった。夜に普通に寝るよりもよく眠れたのでは？と思えるほど気持ちよく夢の世界に旅立てた。

というのもあの校長の声が、中年太りのハゲ親父に似合わないかわいらしい感じ眠気をさそう声だったのが原因だな。いい感じに子守唄になっていた。

俺だって最初のうちは真面目にやろうと思ってたんだ。

…ホントダヨ？

でも聞き始めて30秒もしない内に眠気が来て、50秒もするともうどうでも良くなっていて、1分もすると睡魔という強敵に意識があっさり落とされていた。

だから仕様がなかったんだと言い訳させてくれ。

まあ睡魔の話はここで終わりにするとしよう。

さて、俺が眠っている間に入学式も終わり今は各クラスでホールルームの時間となっている。

だが俺たちの担任になるであろう人物が入ってきた時俺より前の席にいる青い髪をやつが「うほー！」だとかうるさいのなんの。

因みに担任の名前は月読 小萌だった。

あの合法ロリのお方です。

平行世界と言ってもここは変わりが無いらしい。

それから、自己紹介をしてある程度説明を受けたあと解散となった。

俺も帰ろうかな？と思った時に俺のところにある2人が話しかけて来た。

「なあなあ、君入学式で思いつきり居眠りしとったやろ？」

「そうそう、普通は最初くらい自重するもんじゃないかにやー？」

そう言って話しかけて来たのは青髪にピアスを付けた担任の登場に騒いでた男と、金髪にサングラスとアロハシャツを装備している男、

そう、変態の青髪ピアスとシスコンの土御門 元春だった。

あ、自己紹介したのに青髪ピアスの本名聞き忘れた。でももういいか。

「…自重しろってゆーならお前らのその髪とピアスとグラサンとアロハシャツはなんなんだよ。それこそ自重しろよ。」

「あー、それを言われたら…」

「返す言葉もないにやー。」

「まあそんなことはいいや。こうやって話すのも何かの縁だ。ホームルームでもやったけど改めて自己紹介するよ。」

俺は上条当麻。呼び方は好きにしてくれ。」

「それじゃあ上やんって呼ぶ事にするわ。ボクの事は青髪ピアスって呼んでな。」

「土御門 元春。こっちも上やんって呼ぶことにするにゃー。」

「ああ、よろしく。」

「そうや、これからその辺一緒に回らへん？親睦の意味も込めて…」

「こっちは別に暇だからいいぜい。」

「俺も暇だからいいぞ。んじゃ早速いきますか。」

そうして一緒に教室を出てそのまま校外も出て行く。

回ってる途中、青髪が少女を相手に喜々として話かけようとしていた。そしてそれに便乗する土御門のバカ2人を決りこむように放った右で沈めて止めた。

路上で高校生が2人も沈められるのはやたらと目についたらしく、2人の足を持ってその場から引きずって早々に立ち去った。

ガリガリジヨリジヨリいていたが気にしない。

2人を引きずったあとに、金と青の系のようなものが大量に散らばっていたがそれでも気にしない。

その後目覚めた2人と共にまたその辺を回ってある程度いい時間帯になったので解散した。

学校初日はなかなか有意義だったと思う。

高校入学。だから俺は寝る（後書き）

やっと一話目を投稿できました。
遅くなってすいません。

次回は2話です。

主人公設定を少し弄りました。

あと、気がついていらっしやるとは思いますが補足説明としまして
プロローグで「あいっ」という表現が多々ありますが、「あいっ」
というのは神（ゼウス）のことです。
念のため説明させていただきます。

俺は説教される側じゃない！（前書き）

1月1日に修正しました。

俺は説教される側じゃない！

入学式が行われた次の日。

新しく一年生になるにあたっての最初の大きなイベントを終えた事により、新生たちは多少の緊張が抜けたことだろう。

今日学校で行われたのは、委員会やクラス係り決め、身体測定などである。

だが今はそれも終わって一段落し、昼休みの時間となっていた。

教室内では前の学校からの知り合いどうしだったり、はたまた新しく知り合った者たちどうしだったり、それぞれが思い思いに会話している。

そしてそれは当麻に至っても例外ではない。

昨日の入学式後に知り合った青髪ピアスと土御門 元春と共に才タク談義に花を咲かせていた。

そんな特殊な会話をしている三人の元に、一人の女子生徒が割り込んで来た。

side: 当麻

「…というわけでボクが思うに女の子で一番魅力的なのは小萌先生みたいな口リ系であるということを…！」

「あまいぜ青髪！魅力的という事ならメイドの妹！さらにそれが義妹だったらというのが一番ぜよ！」

「お前ら性癖が特殊すぎるだろ！やっぱり日本人なら長い黒髪がだなあ……！」

どうも、上条 当麻だ。

悪いが今の俺はとても忙しい。なぜならこの重傷末期患者2人に黒髪の女性の良さを伝えなければならぬからだ。

え？お前も十分きてるって？

？ なんのこっちゃ？

は？ 今度は何？少しは自重しろって？

…お前、ここにいる俺たちの3人にそんなもん求めてどうすんだ？俺たちは自重なんて鎖からとつくの昔に開放された自由人^{ニート}なんだよ。

俺は今この会話に存在価値を見出しているんだ。時間取らせんな！

「なんや2人とも？別にボクは2人の趣味を否定する気はないんやけど、ロリー一番説を否定するのはただけへんな……」

「そつちこそ、義妹メイドの良さが一番ていうのを理解できないとは、ヤル気なのかにゃ〜？」

「はっ！いいぜ、お前たちが異常しか認めねーっつーなら、まずはその現実をぶち殺す？」

「ちよつと？そこのバカ3人？」

俺たちが己の主張の正しさを証明するための 聖戦（茶番）を始めようと構えるが、怒鳴り声によって横やりを入れられて萎えてしまった。

俺たちは声の主の方へと向く。

そこには長い黒髪で整った顔立ちをしていてからだの前で腕を組んだポーズで立っている女生徒が居た。

その女生徒俺も思ったことだが、多分隣の2人も思ったことだろう。

「…なあ2人とも、どんな女の子が一番魅力的かって話題だったけど、俺やっぱり変えてもいいか？」

「奇遇だな上やん、義妹メイドも最高だが、この時ばかりは変えたくなってきたところだぜい。」

「なんやツッチーもか？実はボクもそう思ってたところや。」

「…やっぱり女の子で一番魅力を感じるって言ったら…」

「巨乳だな!」「巨乳やな!」「巨乳だにゃー!」

「貴様らしい加減にしろ?」

「くはっ!!?」

直後凄まじい威力のゲンコツをもらった。

∴
∴
∴
∴
∴

「∴あの、まずあなたはどちら様でしょうか?」

あ、ありままだに今起こった事を話すぜ。

この女生徒にパンチをもらったと思ったら3人揃って正座させられていた。

な∴なにを言ってるのかわからねーと思うが俺もなにをされたのかよくわからねー∴。

レポート
瞬間移動だとか時間操作とかじゃない∴

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「貴様は自分のクラスのやつ事もわかんないの？あたしは吹寄。
吹寄 ふきよせ 制理よ。」

はい、皆さんなんとなく感じていたとは思いますが、吹寄さんです。

別に俺、分からなかった訳じゃないです。会話を交わすのは初めてだったから一応名前を聞いた方がいいかな〜と思っただけです。

吹寄は原作でもあんまり登場してなかったから俺もあんまり性格を把握しきれてないところがあった。

実際に会ってみて思った事はだ、さつきもいったかもしれないが吹寄はホントにスタイルがいい。このクラスの女子たちと比べてもその差は歴然だ。

スタイルも良くて顔もいい。なのになんで吹寄から色気が1ミリも感じ取れないんだろうか？

美人に罵倒されるのが好きそうな青髪ですらなにも感じてなさそうだ。全く持って不思議である。

でも今そんなことはどうでもいいか。

問題はどうしてこんなことになってるかだ。

「では吹寄さんや、なんで俺たちはこんな状況になってんでしょるか？」

俺の言葉を肯定するようにで同じように正座している2人も「うんうん」と言いながら頷いてくれる。

「そんなのは貴様らが大声であんな変態トークしてるからに決まってるじゃない。」

「変態とは何や！ボクらは1人の紳士として「ああん？」ヒイイ？すみません？」

物凄い迫力だったな。

直接睨まれた訳でもないのに脚がガクブルしてるぜ。正座してるけどね。

土御門も俺と同じ様な事になってた。

「だいたいなんなの？その青い髪にピアスだったり金髪、サンングラス、アロハシャツの三点セットは。あと上条当麻、貴様は入学式の時に寝てたわよね？少しは場をわきまえという事をぶつぶつぶつぶ……」

殴られたと思ったらなんで今度は説教されてんだ？
というか普通そのポジションは俺のものだろうが……

「……なあ上やん、この状況どうにかしてくれニャー……（ヒソヒソ）」

「はあ？何で俺なんだよ……（ヒソヒソ）」

「そりゃあ上やん、自分黒髪ロングが好みって言ってたからやないか……（ヒソヒソ）」

「そうだにゃ〜。それに今なら巨乳属性に風紀種も付いてきてお得だぜい……（ヒソヒソ）」

「別に俺はお前らと違ってそこまで執着してねーよ。さらにいまこの時にはかりは風紀種なんて欲しいとは思わねーよ。仮に上条さんの好みだったとしても、説教くさかったり手が出てくる女性はちょっと苦手何ですけど…（ヒソヒソ）」

「ぶつぶつぶつぶつ…ってさっきから貴様らはさっきから何コソコソしてる？」

「い、いえ！何もありませんよ？」

「そ、そうにやゝ！何にもないにやゝ？」

「そ、そうですよ！別にあなたが少し説教臭いだなんて言ってまあっ…」

「なっ？」

「ちょ？」

「…………へえゝ…そう…」

失言した。

吹寄から口から声が聞こえた時には俺の体は教室のドアに向かってもう動き出していた。

人はものすごく熱い物を触った時、身を守るため先に手が引つ込みそれから熱かったと感じるものだ。

そのような現象を総じて反射というのだが、俺の体はまさにその反射によって行動していた。

頭の中にけたたましいほどの警報音が鳴り響いたのは、廊下に出

た後だった。

2人も少し遅れながらも俺の後に続いて走り出した。

「逃がすか——！」

「上やん！なんてことしてくれんねん？」

「上やんのあほ——？」

ああ、なんていうかもうこれはあれを言うしかないよな…

学園都市に入ってから一度も言ってなかったけど、どうやら上条当麻という人間はこの言葉と共に一生を過ごすらしい…

大変長らくお待たせしました。

それでは皆さん、ご唱和ください！

せーの

「不幸だ——————————？？」

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

その後、俺たちと吹寄の追いかけっこは昼休み明けのチャイムが鳴るまで続けられた。

結果を言えば俺たちは何とか生き残る事ができた。

ある程度まで抑えあるが、能力で強化されていた俺をギリギリまで追い詰めるなんて恐ろしいやつだ。

あれか？怒りのせいで我を忘れて人間の限界でも超えたか？

でもまあ、何はともあれこれで明日の太陽を見る事ができる。

閑話休題

その後は放課後まで何もなく終わった。

今日は用事があり青髪や土御門たちと一緒に帰らず解散することに。

用事というのはまあ、買い出しだ。

この学校の近くのスーパーで夕市があるらしい。俺はそこで半額の卵を手に入れなければならない。

貧乏学生である俺にとってはどうしても見逃せない。

そうして急いで靴を履き替え学校を出た俺は早足のままスーパーへと向かう。

だがその途中なにやら大声で言い争いをしているだろうことがわ

かるものが聞こえた。

なるべく早くスーパーに向かいたかったのではあるが、どうにも気になって仕方がない。

携帯を使って時間を確認してみて

、まだ少し余裕があることが分かる。

そう考えると言い争いが聞こえた方へと向き直りやや駆け足で行く。

現場と思わしき場所に着くとそこにあっただのは、髪を金に染めたり耳にピアスつけたものだったり、誰が見ても不良と答えるであろう男たちが5人。

そしてそのうちの1人によって羽交い締めになれ襲われかけている女生徒が1人という光景だった。

こんなものを見ちまったらもうスーパーがどーのこーのなんて言っ
てられない。

俺はその集団に向かって歩いて行った。

俺は説教される側じゃない！（後書き）

次回に続きの話をします。

まだしばらくインなんとかさんは来ません。

あと主人公設定で説明不足が結構あると思いました。
近いうちに変えようと思います。

あと、セリフで その現実をブチ殺す というのがありますが、
手に現実殺しを持っているため間違いという訳ではありません。

むしろこっちで行こうかな？とも思っております。 または合わせる
かもしれません。

鉄の女でも結局は女の子（前書き）

新年あけましておめでとうございます

元旦に投稿出来ませんでしたので、いま挨拶させていただきます。

鉄の女でも結局は女の子

side当麻

「お前ら、5人でよってたかって女の子1人に何してる。」

俺はその集団に聞こえるだろうところまで近づき言った。

こいつらは自分たちの事に忙しかったのだろう、俺が近づいているのに気づかないで声をかけた時ようやく気づいた。

不良達は部外者であるおれに対して「何だこいつ？」って感じの疑問顔になっている。

だが女生徒の方からは驚愕って感じのものが読み取れる……つてこいつ、遠目からじゃ不良たちと重なっててよく見えなかったが…

「あ、あんた…上条当麻！」

「吹寄？（なんであの吹寄が？）」

そう、吹寄だった。

ていうか吹寄ならこいつらに一発入れて逃げるくらいできそうだと、昼休みの吹寄の印象が強いのでそう思ってしまう。

…つてかよく不良の方を見たら顔にもらったのを象徴するように頬が赤く若干腫れているやつが居た。

「お前何？部外者はあっち行けよ。」

「女を助けてヒーロー気取りですか？」

「それとも、あれか？俺たちにボコボコにされたいマゾなのかな？」

そんなことを言った後、不良たちは「へへへっ」と薄気味悪い笑いをする。

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんなの見て見過ごせるわけないだろ。」

「な？あんたこの人数相手にやりあおうってゆーの？無理よ？」

「そうそう、この嬢ちゃんの言うとおりだぜ。」

「俺たちは今お楽しみ中なんだよ。ボコボコにされなくなかったらさっさと帰んな。」

「だからさっきも言っただろ？見過ごせるわないつて…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

語尾を強めて力を込めると共に踏み込む。

不良達は吹寄を中心に囲む様に立っていたが、俺はまず一番近くに居たやつまでの距離を一気に詰める。

そしてその勢いままに頬を殴る。殴られた不良は不良達の間を吹っ飛び3mくらい転がって停止した。

ぴくりとも動かなことから気絶したのだろう。

他の奴らには俺がダッシュする姿勢が見えたと思ったらもう殴るところだったという風に見えてたと思う。そのぐらいの踏み込

みをしたからな。というより今は縮地の技術に近いな。

そしてそれを証明するかのように周りの奴らは「は？」と驚きを露わにしている。

驚愕して固まってる間に殴った不良の右側にいたやつに、殴った勢いを利用して、右脚を軸に左の回し蹴りを脇腹に決める。

殴られた不良同様、そいつも勢い良く吹っ飛び少し転がった後に停止した。気絶はしておらず、寝転がったまま呻いている。

そして今度は左側に居たやつに掴みかかり、柔道の背負い投げをで地面に叩きつける。

不良は「がはっ？」と息を吐いて悶絶している。

柔道や合気道の達人が技を決めると、やられた方は何をされたかわからないうちに転ばされているという。

俺は転生前、色々な格闘技について調べたりそれを試したりするのが好きだった。いわゆるバトルマニアなのか？

そしてもらった能力なんかでより技術を強化してその領域にたどり着くことができた。というよりさらにその先までいつている。オリジナルの技術も開発してる。

つまりこの不良は俺が向かって来たと思ったらいきなり視界が回って地面に叩きつけられていたと感^じてるはずだ。

3人を倒した俺は吹寄を羽交い締めにしていない、吹寄に手を出そうとしていた不良を見る。

だが流石に驚きからの硬直が解けたのか、こちらに殴りかかってきた。

俺はその拳を側面叩いて逸らす。不良は前のめりにバランスが崩れ、その体の胴に向かってアッパー気味に殴る。

カウンターとなったそれを食らった不良は腹を抑え、崩れ落ちる様に倒れる。

残り1人となった不良の方へと向き直る。
だがそこでその不良は…

「う、動くんじゃないっ？こいつがどうなってもいいのか？」

「「っ？」「

…ポケットからナイフを取り出し吹寄の顔に突きつけやがった。

襲おうとした拳句に自分がやられそうになったたら人質にする？

…
…
…
…
…

フザケンナヨ…？

s i d e o u t

s i d e 吹寄

昼休みの時の3人組を思い出す。入学したばかりだったから見過ごしそうかとはおもっていたけど、教室であんな会話を大声でさ

れていると気になってしまふのは仕方がないと思うわ。

そのバカな会話をしている3人もやっぱりバカなやつらだったわ。

あたしはその3人の中でツンツン髪のがつが特に気に入らなかった。

それはそいつから発せられていた気だるげな感じが、何かにつけて手を抜いてそんな雰囲気の原因ね。

突然だけど話を放課後に変えるわ。

帰りのホームルームが終わった直後、あたしは帰りの支度を手早く済ませて、早々に帰った。

何か用事があるということでもなかったけど、強いていうなら…気分ね。

それに今考えて見ると…入学したてのあたしにとって、まだクラスに親しい友達なんていなかったから残っててもあまり話すことも無かったしね…

そうして帰路に立ったのだけどその途中でナンパにあった。

ナンパしてきたやつらはいかにも不良って感じだったから相手にしないでそのまま無視した。

しかし相手もしつこく言い寄ってきた。でもあたしは無視し続けたわ。

それに不良達は腹が立ったのか「おい！」っていう怒声と共に強引に手を引っ張られた。

もちろんあたしも抵抗したわ。不良の1人を殴るという形で…でもそれに不良達が完全に切れ、あたしが殴ったやつとは別

の不良に取り押さえられてしまった。

「離しなさいよ？」

「そう言われてはい、わかりましたって離すわけねーだろ。」

「それにしても、とんだ暴力女だ！そんなお前には調教が必要な
！」

不良達がそう言ってニヤニヤ笑い出すといやらしい手つきで、
あたしの胸に手を伸ばしてきた。

悔しかった。あたしにできる抵抗といえはこいつらを罵倒す
るぐらい…本当に悔しかった。

「お前ら、5人でよってたかって女の子1人に何してる。」

そんな時、声が聞こえた。

きつとこの状況を見兼ねて助けようとしてくれたんだと思う
けど…でもその声はすごく最近聞いたことある声だったわ…

そして確認して驚いた。

「あ、あんた…上条当麻！」

「吹寄？」

その声の主は、あのバカ3人組の1人の上条当麻だったわ。
上条は「なんで吹寄が？」って疑問が読み取れるわね…。
あたしだってなんであんたがこんな所に…って思ったわ。

ただ、気になる事があるのだけど…

「（こいつ、ホントにあの時と同一人物？）」

今のこいつからは昼休みのような気だるさや、ちょっとふざけてる雰囲気欠片も感じられない…むしろその真逆の真面目で冷静な印象しか伝わってこない。

同一人物か疑うのも無理ないと思うわ…

そんな事を考えてる間に不良達と上条とでやり取りがあったらしく、あいつは…

「別にマゾでもヒーローのつもないが？それに部外者だろうがこんなの見て見過ごせるわけないだろ。」

…って言った。

さっきの割り込んだ時の言葉からもあたしを助けようとしてくれるみたいだけど、あたしを抑えてる奴を抜きにしてもまだ一対四…それを目の当たりしてもまだ助けようとしていることに、流石に驚いたわ。

最も、上条がこの人数差をものもしない能力があるとするなら話は別だけど、あんな普通の学校に通ってる時点でそんなものがあるとは思えなかった。

だからあたしは驚いたって感じの言葉と共に言ったわ、「無理よ」って…。

それを肯定する様に不良達も何か言うけど、それでもあい

つは顔色一つ変えたり、考えるそぶりも無い。

「（なんでそんなに自信たっぷりなの？こいつは…）」

でもその疑問は次のあいつの行動で解けたわ…

「だからさつきも言っただろ？見過ごせるわないって…まあ確かに、この人数差だと無謀な様に見えなくもないけどな、ボコボコにされるのが俺とは限らねーぞっ！」

…そう言っただけで踏み込む姿勢を取ったと思ったら、いつの間にか近づいていて1人の不良を殴った後だった。

「……は？」「……」

あたしを含めて不良達からもそんな事が漏れた…

でも上条はあたし達が惚けてる間も止まらずに次々と不良を倒していき、あっという間に不良はあたしを取り押さえてるだけになった。

「……凄い……」

「なっ、なんなんだこいつ？」

上条が次々と倒していく様子に、あたしは自然とつばやいていたわ…

でも1人になった奴はそうも言っただけで倒れないみたいね…まあそうよね。だって次は自分の番なんだから。

でも、次の展開はあたしには予想外だった…

「う、動くんじゃないっ？こいつがどうなってもいいのか？」

「っ？」

「っ？（ナ、ナイフ？）」

不良はやけになったのかナイフをあたしに突き付けてきた。
これにはあたしも流石に怖かったわ。

だってただのナンパが自分の命の危機になったのだから…当然よね…

もしかしたら死んでしまうかも…そんな悲しい気持ちになっていたら突然その場の気温が下がった気がした。

「（か…かみ…じょう？）」

その原因はすぐにわかった。目の前にいる上条がもの凄い怒気と共に憤怒の形相でこちらを、正確にはあたしの後ろの不良を睨んでいたからだ。

「デメエ、ふざけんじゃねーぞ？？？？」

「っ？」「ヒッ？」

上条が突然、空気がビリビリとする程の怒鳴り声を挙げた。それに対し不良はビクツとなって短い悲鳴を挙げた。それも仕方ない事だと思うわ。あたしも声が出そうになったから…

不良が怯んで硬直したのを上条は見逃さなかった。一気に近づいて不良のナイフを持つてるほうの腕を掴む。

その腕を引っ張りあたしと不良引き離すとその腕を掴んだまま柔道の一本背負いで不良を地面に叩きつけた。

「ガアツ？」と声を挙げた不良の上に馬乗りになる。痛みからか、不良はその時にはナイフから手を離してみたい。

「なんであんな事なつてたのは何となく分かる！大方ナンパに失敗だからその腹いせ何だろ？だがな、そこで助けに入った俺にやられそうになったからって自分の都合で人質とっていいわけねーだろーが？しかもナイフまで持ち出して！お前達は吹寄に相手にされなかった時点で諦めなきゃいけなかったんだよ？でもな、お前みたいな腐った奴には言葉だけじゃわかんねーだろうからな、痛い目にあってもらう！歯ア食いしばれ？」

上条はそう言つて不良の顔面に拳を叩き込んだ。
不良は鼻から血を流して動かなくなった…気絶したみたいね。

「（……終わっ…た…）」

あたしは終わったことで緊張から解け、地面にへたり込んでしまう。今回ばかりはホントに怖かったもの…

上条は気絶した不良から離れてあたしの方にやって来た。
目の前まで止まってあたしに手を差し出して…

「もう大丈夫だ。怪我は無いか？立てるか？」

怒った時の憤怒の表情と違い、優しげな声で微笑みながら掛けられた言葉に、

本当に安心できた。

side out

side 当麻

その後、あの吹寄が突然泣目になったから相当焦った。完全にオロオロしてたと思う。

とりあえず抱き寄せて、もう大丈夫だからと言葉を掛けながら頭を撫でてやった。

そしたら嗚咽を漏らしながら泣き始めたから、余計に悪化させちゃった？と思い離れようとしたんだけど吹寄が両手で俺の制服の胸の所を掴んで離さなかった。

「（え？え？この人本当にあの吹寄さん？別人じゃないよね？）」

考えてみたら、いきなりナイフ突き付けられて殺されそうになっただけだから、いくら吹寄でも女の子だし、相当怖かったんだろうな。だからそのままにしてやった。

それから数分して離されたから、とりあえず場所を移そうと思^{ジャッジメント}い電話で風紀委員に通報と事情を説明してそこを離れた。

今考えたら路上で女の人を抱き寄せるとか、変態じゃね？
周りに人がいなくてホント良かった…

近くにあった公園にやって来た。吹寄はベンチに座らせて俺は自動販売機に飲み物を買いに来た。

吹寄の好みがちよっとわかんなかったから、とりあえずお茶を自分の分も含め2つ買ってベンチに戻った。

「吹寄、お前の好みがちよっとわかんなかったからお茶にしたんだけど、これで大丈夫か？」

「だ、大丈夫、問題ないわ。ありがとう。」

そう返事をもらって安心した俺は、吹寄の隣に座る。
お茶の缶の金具を引っ張り、缶を開けて一口飲む。缶を口から離して、「ふう」と息を吐く。

吹寄もお茶を飲んで一息した所で話しかける。

「落ち着いたか？」

「え、ええ、恥ずかしい所を見せたな上条。」

どうやら、もう大丈夫そうだな、目元がまだ若干赤いが…て
いなか顔全体がなんだか赤いような…

恥ずかしいって言うてたしその通りなんだろうな…

「あれは普通の反応だよ。別に恥ずかしいことなんかじゃない。」

「そう言われるとこっちも少し楽だね。ありがとう。」

「…」

「…何かした？」

「あ、いやその、吹寄がありがとうなんていうのが以外で…」

「…知り合ったばかりとは言え、貴様がどという目であたしを見てるかよくわかったわ。」

「へ？あ、いやいや！こ、これは言葉のあやでして、その、えっと…ごめんなさい？」

「…ま、まあいいわ、今回は助けてもらったんだし特別に大目に見るわ。」

「へ？あ、ありがとうございます。」

そこで一旦会話が途切れた。やっぱりあんな事があつた後だと話しづらいし、会話もそこまで続きそうもない。

あと、やっぱり吹寄に違和感がある。さっきから何となく話す時なんかどもってるし、今の所だつて前なら殴られる所だと思うし…でもやっぱり気のせいなのかな…

「そういえば吹寄、今回の発端を聞いてなかったんだが、やっぱりナンパだったのか？」

「…ええ、その通りよ。あいつらがナンパして来てそれを無視してたら強引な手段になって…反撃に1発殴ってやったら襲われそうに

なつたのよ…。」

「そうか、やっぱりナンパだったか、まあ吹寄は顔も整ってて可愛いしな、それにスタイルもいいしナンパされない方が可らしいよな…。」

「っ？か、かわっ／＼／＼き、貴様はいきなり何を言い出すのよ？／＼。」

「え？何がだ？俺は本当にこいつの事を言っただけだぞ？」

「つつっ！！！？／＼／＼／＼（なんでこいつはこういう齒の浮く様な事がいえるの？）」

「ど、どうした？なんか急に赤くなった様な…まさか熱か？すまん吹寄、ちよっと熱測るぞ？」

そう吹寄に伝えて近づく。吹寄の顔に手を添えてデコとデコをくっ付ける。

なんか吹寄が「な、なななな／＼」とか言ってる気がする。それと共にどんどん温度が上がってるような気もするんだけど…

「／／／なななななにをするんだ貴様はーっ？／／／／／／／」

「じふっ？」

な、なんで上条さんはいきなりボディーブローを喰らわねばならんのですか？俺はただ良かれと思ってやっただけなのになんでこんな仕打ち？

「ハア：ハア：ハア：ハア：／／／／／／」

「な、何するんですかいきなり？上条さんが何したっていうんですかっ！」

「う、うるさい上条当麻！／／／そんな事はなんでもいいだろう？／／男がいちいち気にするな？／／」

「いやいや！男でも気になる事は気になるですよ？」

「と、とにかく！／／今日はありがとう、助かったわ。あたしはこれで帰るわ。また明日会いまs「あ！ちよつと待った！」今度はなんだ！」

「帰りは1人で大丈夫なのか？」

「はあ？流石に一日に二回、もナンパになんか会わないわよ。」

「そうかもしれないけど単純に心配だからだよ。あと今回みたいに何か困ったことがあったら言えよ？これもなにかの縁かもしれないし、お前のために時間も作るよからな。」

「っ？／／／ええい貴様というやつは次から次へとなんなのよ！！／／／もういいまた明日な！／／」

そう言つて吹寄はダッシュで帰ってしまった。何をそんなに急いでるんだ？

でもまあ、吹寄も帰ってしまった事だし俺も帰るか。

あ、
スーパ―のこと忘れてた。

鉄の女でも結局は女の子（後書き）

投稿一日空いてしまつて申し訳ありません。

今回の2話は吹寄と絡みなのですが、吹寄の口調が資料が少なくてわからなかったのが原因で遅くなりました。

思いつきり原作捏造です。

そして、一つ前の話しも修正しなければならなかったのでより時間がかかってしまいました。

しかもこれでもまだ妥協点ですのでこれから先、修正する可能性大です。

修正といえば主人公設定を大きく修正しました。
目を通していただけたらと思います。

次回も本編更新します
イメージ的には少し時間を飛ばしてビリビリとの会合をやるのかな？
なんて思っております。

ゴールデンウィーク、時々フラグ（前書き）

御坂とのエンカウントの予定でしたが急遽変更しました。そして…

Y? A? T? T? I? M? A? T? T? A

それだけ言っておきます

ゴールデンウィーク、時々フラグ

入学式から早いもので1ヶ月。

桜の面影などもう残っておらずもう緑しか存在しない。

今日は5月の始め、しかもゴールデンウィークである。

世間的にはすべての学校が休みであり、学園都市でも例外はあるだろうが基本的には休みとなっている。

ゴールデンウィークを利用して、固まってきたグループで何処かに出かけるなど、家でゴロゴロ過ごすなど、学生達は大概その様にして過ごしている筈だ。

ここは第7学区のとあるアパート、その一室に住んでいる者がいる。

そう…上条当麻だ。

当麻はこのゴールデンウィークを家で過ごすため布団に包まり、コンクリートの塀に張り付くカタツムリのようにベッドに張り付いていた。

そんな時、一本の電話がかかって来た…

side当麻

♪ 巫女巫女。ー スー！ 巫女巫女ナー。ー！ 生麦生米巫女。ー。 ナー スー！…♪

「…なんだ？人が折角気持ち良く寝てる時に…それにこの着信音は青髪か？」

ゴールドenウィークを迎えた今日この頃、俺は自宅で惰眠を貪るためにベッドに寝ていた。

吹寄のナンパ騒動から早いもので一ヶ月が経った。あの時から俺と吹寄の仲はそれなりに良くなった。

朝に挨拶したり、たまに昼飯と一緒に食べたり、稀に一緒に帰ったり、その様なことをする様になっていた。

でも、吹寄がその時顔を赤らめていたのは何だったのだろうか？風か？

そして、そんな俺たちを見て青髪と土御門がうるさいのなんの…俺たちをからかって怒った吹寄に沈められていた。怒っていたからなんだろうな…顔が真っ赤だった

因みにからかった後の会話を再現すると…

「カミヤん、吹寄とは何があつたんや？」

「そうだぜい、あれだけ嫌われてたのに、いきなりフラグが立つてるなんておかしいにや〜！その辺キリキリ吐いてもらうぜい！」

「いや別に何も無いって。あ、でも昨日ナンパされてる所を助けてやったな…でもそれだけだ。それに吹寄に限ってフラグが立つわけないだろ？」

「な？あれだけ分かりやすいのに気づかないやんて…どうなってるんや？」

「あり得ないぜい…これからはコレをカミヤン病と命名しよう。
そしてカミヤン…」

「「恐ろしい子？」」

てな感じの会話が あったんだがその時の内容は今でもあまり理解
出来ていない。全くもって意味が分からん。

まあ過去の話はここまでにしておいて、そろそろ電話に出るとし
よう。

ピッ

「もしもし、なんだ青髪？」

『あ、カミヤン？今な、外を適当にぶらぶらしとったらツッチーと
会ってな、そのまま邪魔することになったんよ。だからカミヤン
も来いへん？所でカミヤン今どこ居る？』

「…俺は今家でゴロゴロしてて忙しい。」

『なら暇なんやな？それじゃ行きよるから、準備しとってな？ほな
またあとで。』

「おい、聞いてたか？俺は今忙しいと『プツッ、プーッ、プーッ、
プーッ、プーッ…』……」

あの野郎…勝手に切りやがって…

でも、忙しいとか言いつつもぶっちゃけ暇だ…

…行ってみるか
そう思い準備を始める。

「（まあ、土御門の家は隣だし、ゆっくり準備しても間に合うだろう。）」

ていう最初、土御門が隣だったことに驚いちゃった。原作知識はあった筈なのに…どうやら細かいことは忘れちゃってるらしいな…

そしてある程度の準備を済ませたら、外から話し声が聞こえて来た。どうやら二人が来たようだ。

玄関から顔を出し確認するとやっぱり青髪と土御門だった。

「よう2人とも。」

「カミヤん、今呼ぼうと思った所やで。」

「でも、手間が省けて良かったんじゃないかにゃ。まあ2人とも、今鍵開けるからちょっと待っててくれにゃー。」

土御門はそう言って鍵を開けようとするが、なんか疑問顔になっている…

「どうしたんだ土御門？」

「ん？ああ、なんか鍵が開いてる…」

「は？ま、まさか泥棒かいな…？」

「警備員アンチスキルに連絡するか？」

「いや、多分あいつだから大丈夫だぜい。」

あいつ？と思うが土御門は中に入って言ってしまっ

それに続くように俺も入って行くと、中には少女がいた

カチューシャにメイド服を着た少女だった。

その少女は土御門を見てこう言った。

「アニキ、何処行つてたんだー？」

：

：

：

：

「義妹いせ妹の土御門舞夏たぞー。いつもアニキがお世話になつてる。アニキと被るんで舞夏って呼んでくれて構わないぞー。」

「土御門をお世話してます、この部屋の隣人でもある上条当麻だ。よろしくな。」

「同じく、ツッチーと同じクラスやで。ボクのことば青髪ピアスって呼んでくれや。」

「わかったー。」

「ちょー！2人とも何をいつてるんだぜい！お世話された覚えなんか無いにやー！あと、舞夏も納得するな！」

「所で舞夏がメイド服を着てるのはコスプレなのか?」「おい、カミヤんスルーなのかにゃー?」

「まさか、ツツチーの強制やるか…」「青髪までもにゃー?」

「違うぞー、私は繚乱家政女学校に通う真正正銘のメイドさんなんだー。しかもエリートなんだぞー。」「にゃー、俺の愛しの義妹まで…」

俺たちが土御門をスルーしているとorz状態になってしまった。舞夏にスルーされたのが相当効いたのか、ズーンっという効果音と共に縦線があるのが見える。

義妹に無視されてここまで落ち込むとか、まったくもってうつとおしい…

「ていうか…ツツチーがメイドで義妹やったら良いとかいつだか言うてたけど、あれ妄言やと思っとったわ。」

「そうだよな、しかもこんなに可愛いときたもんだ。土御門の義妹にはもったいないな。」

「……アニキ、私って可愛いのかー?」

「ああ舞夏、お前は可愛いぜい。青髪、元が居ないであんな事言ってたら痛い奴じゃ収まり切らないにゃー。そしてカミヤん!貴様人^ち家の義妹になにフラグ立てようとしてる?ああん?」

ええーなんでこいつ、こんなに切れてんの?」

あと俺に立つの不幸フラグだけだと思っんだが……あ、やべえ

目から汗が垂れる。

「なに急に怒ってんだ？俺はただ思ったことを言っただけだぞ？」

「……………ぽっ」

「だーかー！ー！そんなこと言うからフラグが立って言ってるんだにゃー？あと舞夏！頬を赤らめるんじゃないぜい？」

「こ、これがカミヤん病の感染力とその威力……恐ろしい……恐ろしいでカミヤん……」

全く持つて意味が分からん……そんなお前には「日本語でok」と言っでやりたいが、もっとややこしい事になりそうだからやめとした。

青髪もなんか言っでたが怒鳴られてる俺には聞こえなかった。

あと土御門、お前キャラが変わってるぞ。

そんな風にギャーギャー騒いでいたが、時間が経つとそれも収まっていた。

で、なんだかんでもう昼飯の時間帯になった。

「舞夏、今日の昼飯は何だにゃー？」

「カレーだけど、私とアニキだけだと思ったからそんなに量ないぞー。」

「え、そうなん？ボクも舞夏ちゃんのカレー食べたいわ。なんたつて、本物のメイドさんのカレーやもんない。」

「俺も食ってみたいな…1人暮らしたと料理するし、出来れば参考にしたい。」

「そう言ってくれるのはありがたいけど…」

「やらん！やらんぜい！このカレーは兄である俺の物にやー！何人たりとも渡さないにやー？」

…このバカアニキがうるさいし…」

全くこのシスコンは…ここまで来るともう救いようがねーな。でも俺にも意地がある、絶対に食べたい。

…あ、そうだ。

「なあ、実は俺も昨日カレーを作ったんだけど…舞夏のカレーと俺が作ったカレーを分けて食べるってのはどうだ？俺も料理が好きで結構自信があるんだけど自分だけじゃよくわからないからな、この機会に他の人に評価してもらいたいんだが…いいか？」

「ボクは全然それでも構わへんよ。」

「私もそれで構わないぞー。エリートメイドである私が評価してしんぜよう。」

「舞夏のカレーは渡さないのにやー？」

「…カミヤん、このシスコンを何とかしとくから、はよ取って来いな。」

「その間に私が準備をしてくぞー。」

そう言う2人に俺は頷いて部屋を出る。

靴を踵を踏んづけたまま適当に履いて玄関を出る。隣である俺の部屋に入りすぐにカレーの鍋を温める。

温め終わったカレーを鍋ごと隣に持つて行く。

土御門の部屋に戻るともう配膳されており、4人分のご飯とルーを入れるための皿が2つある。1つにはもうルーが注いであった。

「すっげー美味そうな匂いだなー。」

「せやなー、流石はメイドさんやで。」

「ふふん、そうだろうそうだろう、兄としても鼻が高いにやー。」

「これでも一応エリートだからなー。それより早くそのカレーを出してくれ。」

おっと、そうだった。

カレーを皿に注ぐために鍋の蓋を取る。部屋に俺の作ったカレーの匂いも充満する。

プレッシャーを感じた。

突然の事になんだ？と思つてるとどうやらその発生原は舞夏であるらしい。目がこれでもかってぐらいに見開られていた。

俺が若干気圧されていたら、舞夏がもの凄い速さで動き、気がついたら鍋を掻っ攫われていた。

舞夏はそのままのスピードで皿に均等にカレーを別けると「いただきます?」と言って先に食べ始めてしまった。

「「「「「」」」」」

俺たちは呆然とするしかない。

「…おい土御門、御宅の舞夏さんは一体どうしたんですか?」

「…多分、カミさんのカレーにメイドか料理人魂を刺激されたんじゃないかにゃー?」

「確かに、カミさんのカレーもいい匂いしとるしな。」

「…まあ、俺たちもいただきますか?」

それに2人も頷いてくれた。

「いただきます」と言って俺たちも舞夏に遅れて食べ始める。まずは舞夏の作ったカレーから食べる。

「匂いから分かっていたが、本当に美味しいな。店に出してもいけるだろこれ…」

「ボクもそう思うわ。こんな美味いもんが頻繁に食べられるなんてツツチー羨ましいで…」

「フツハツハツハツ、そうだろう!やはり義妹メイドは最高って事だにゃー!」

「…スルーでいいか？」

「せやな。それよりカミヤんのカレーも食べてみようや。」

「ま、俺の義妹のカレーには敵わないだろうがな。」

そう言っつて2人は俺のカレーで一口食べる。その間も俺は舞夏のカレーを食べる。使われてる物を考えながらしっかり味わう。とそこで、俺のカレーを食った2人が驚きながら叫んだ

「な、なんだこのカレー？このカレーの美味さは舞夏と同等、いやそれ以上だにやー？」

「メイドの訓練を受けとる舞夏ちゃんより美味しいやなんて、どんな風に料理してんねん？」

「そんなに美味かったか？自分じゃ分からないもんだな…」

そんな風に思っていると、そこまでずっと黙ってガツガツと食べてた舞夏が…

「……………負けた」

…先程の土御門のようにorz状態になって落ち込んでしまった。しかもなんか涙目だ。

「ってカミヤん！舞夏のマイド魂折つてもうて…いや、粉碎してもうてるがな？」

「カミヤん！貴様、俺の義妹を泣かしたな？許さないぜい？」

「なんだ？俺が悪いのか？メイドより不味いものを作らなきゃいけなかったのか？」

理不尽だろう！なんでわざわざ不味い物を作らねばならない！でも、俺が原因らしいしとりあえずは舞夏を慰めなければ…！

「えっと舞夏！なんて言ったらいいのか、えっと…そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味しい料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

俺は頭を撫でながら言ってやる。俺が土御門に殺される、頼むから泣き止んで？

と念じていると舞夏が多少持ち直した。
手を床に付いている状態から上目遣いで見上げてくる。
不覚にも可愛いと思ってしまった。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

「……………／／」

あれ？なんか顔が赤くなってるような…
そして後ろから凄まじい殺気を感じた。

「上条当麻、殺す…！」

「え、あの土御門さん？口調が変わってますよ？ほ、ほらいつもみ

「たいにカミヤんって呼んでくれよっ？」

危なっ！こいつ本気だ！本気で殺しに来てる！スプーンの持つ方を目に向かって投げやがった！

俺はただ舞夏を励まただけじゃん！

ええいとりあえず今は逃げる！

玄関に向かってダッシュしドアを開ける。靴なんか履いてる時間はない。靴下のままアパートを駆け抜ける。

土御門もどうやらそのまま追いかけて来てるようだ。

ああ、この逃亡^{デスゲーム}はいつまで続けなければならぬんだろうな…と
りあえず言おう

「不幸だーーーー！！！！！！」

「待て！上条！」

「カミヤんの鈍感もホンマ救いようがないなあ…」

「…／／」

side out

side 土御門

カミヤんの鈍感にはほんと呆れるぜい。

いつの間にかあの吹寄とフラグが立ってたし？あろう事か俺の義

妹にまでフラグを立てやがったにやー。

ていうかもう、呆れを通り越してむしろ感心したぜい。

エージェントの俺から言わせてもらえば、あのカミヤん病は人心掌握に使えると思った俺は、なかなかに冴えてるんじゃないかにやー？

でももしそれをしたら、片思いに苦しむ男どもが増えるからやめとくにやー。

全く、厄介なのは幻想殺しだけでいいってのにその対の現実殺しまであるし、本当にカミヤんは恐ろしい男だぜい。

でも今は、このリアル鬼ごっこに全力を注ぐとするかにやー。

side out

side 舞夏

ゴールデンウィークになったしー、私はアニキの所にご飯を作りにいった。けれどアパートにはアニキがいなかったんだぞー。

だからアニキから貰ってたスピアの鍵を使って中に入って待ってたんだぞー。

暫くしてアニキは帰ってきたけどアニキは友達を2人連れて来たんだー。

上条当麻と青髪ピアスって言うらしいな！。

自己紹介を簡単にやって適当に喋ってたらもう昼ご飯になってたんだ！。メニューはカレーだったけど、量がそんなになくて困ってたんだ！。

そしたら上条当麻が自分が作ったカレーを持って来るって言うから、私は評価してやろうと軽い気持ちでいたんだ！。

驚愕した。

料理の指導なんか受けてなんかなさそーなのに、私よりも全然美味かったんだ！。

エリートとしてメイド魂を砕かれたね！。

「えつと舞夏！なんて言ったらいいのか、えつとー…！そ、そう！お前のカレー本当に美味かったよ！俺の周りにはこんなに美味しい料理作れる女の子は居なかったから土御門が羨ましいよ！将来いいお嫁さんになれるよ！」

上条当麻は必死に慰めてくれて、私にも嬉しい事を言ってくれた！。

多少立ち直る事が出来たな！。

「…本当かー？」

「ああ、本当だ。何なら俺が欲しかったくらいだ。」

前のやり取りで上条当麻を少し良いかなーなんて思ってた私にこれは効いたね！。多分、赤面してたな！。

アニキと同じくらいかそれ以上に良いと思ったよー。

お嫁の話があつたけど、その前にまずー、上条当麻の味を超えねばなるまいなー。

上条当麻、貴様は私の中の眠れる獅子を目覚めさしてしまったのだよー。

絶対超えてやるから、
これから覚悟しろよー！

ゴールデンウィーク、時々フラグ（後書き）

なんかすんませんでした。

これは正直作ってて投稿しようか悩みました。

私的にはこの作品ではとことんハーレムを目指してるつもりなのですが、

これはいいのか？

と思ってしまった。

余りに不評なら何かしようと思っっています。

さて、前回の吹寄と同様、いやそれよりもやっちゃまった感がやばいです。

一応この小説での土御門舞夏のコンセプトはアニキは好き、しかし当麻が好き、感情表現が原作よりは豊かという感じです。

気に入っていただけたらいいのですが…まあそれは諦めます。

次回こそはビリビリします。

今後よろしくお願いします。

関わっても面倒なだけ

出会い。

その単語単体から受ける印象は、良いか悪いかで考えたら良い方に属するだろう。漫画や小説でも、その出会いから新しい恋が…とか、その出会いが私の人生を変えた…とか、いい意味で使われる事が多いからだ。

出会いを良いと感じるのは当然のことでは無いだろうか…

でも必ずしも良いことばかりではない事を忘れてはならない…

入学式から約二ヶ月経って6月。この月にはもう、4月のような清々しい心地よさはない。夏の始めであり梅雨の時期でジメジメとした気持ち悪さすら少し感じる時期だ。

そんな時期に1人少年と1人の少女が出会う。出会いのシチュエーションとしてはなかなかいい…だが、内容は悪いの一言に尽きる。

そんな二人がこれからどういう関係になって行くのか…それは二人の今後の対応しだいだろう……

side当麻

ゴールデンウィークから一ヶ月と少したった6月の中頃、もう大分暑くなり衣替えも迎えていた。服装は薄い中着に半袖ワイシャツのみになっている。

そうそう、ゴールデンウィークで土御門と色々もめたが、別に仲は悪くなっていない。むしろ義妹メイド談義をして関係がより良くなっただけだ。

なんか青髪が「カミやんがツツチーに侵食された!」とか言ってたが・・・なんのことだ?

話を戻すと俺は今、日が沈み完全下校時刻の過ぎた時間帯を歩いている。

今日の授業を終えて帰ってる途中コンビニが目に入ったのだが、そういえば週刊誌の新刊が今日だったな...と思ひだしコンビニで立ち読みをした。

楽しい時は時間が経つのが早いもので、気がついたらもう日が沈んで、帰りが今になっているというわけだ。

帰り道を歩いている途中、俺より少し年下ぐらいの少女が壁に背を預け、それを取り囲むように8人の不良たちが居るのが見えた。

「(俺はナンパの現場によく出くわす運命らしいな...)」

吹寄の時もそうだったし...

でもまあ、見てしまったからには放っておけないよな...だが、不良は8人...別に全員を一度に相手にしても勝つ自信はあるが、流石にめんどくさい...

これはあれだな、知り合いの振りをしてさりげなく少女を連れ出す作戦だ。

そうと決まれば早速行動、そいつらの所へ行き、不良の間を通りながら少女の元へ歩く。

「お、居たいた。すんません連れがお世話になりました。ダメだろかってにいなくなつた……ま、まあ見つかったから良かったけど。じゃ、じゃあ俺達はこれで……」

正直つまずきながらも最後まで言い切った俺を褒めてやりたい。

さて、なぜ俺がこんなにも動揺してしまったかと言うと、それは少女に原因がある。だがなぜ少女に原因があるのか、結論を言ってしまう……

その少女は……

「誰あんた？」

……御坂美琴だったからだ……

この学園都市に来た頃、初めにビリビリにちよっかい出そうかな？なんて思ったことがある。でもその時は考え直したんだ……

今会ったらこれから先、会ったびに追いかけて回されるんじゃないか？って……それはちよつと嫌だったためやめたんだ。どうせ後でエスカウントすると思つたし……

でもそれが今とは思わなかった。完全に不意を突かれた気分だ。

しかし今はそんなことどーでもいい……俺は驚きで言葉をつまらせながらも言い切ったつてのに、それをこいつは「誰あんた？」の一言で切り捨てやがつて……作戦台無しじゃねーか！俺の苦勞も台無しだっ！

「ちよ、おまつ！空気読めよ？今の流れをどうしてそんなバツサ

り切り捨ててんだよ！俺の作戦が台無しじゃねーか！」

「なんで私がそんなことしなきゃなんないのよ。それにあんたの作戦なんか知らないわよ。」

「何だデメエ？舐めた真似してんじゃねーぞ。」

「なんか文句でもあんのか？ああん？」

「うるせさいんだよお前ら？俺は今、俺の作戦を無駄にしたこいつと話してんだよ？」

全く、助けようとして考えた事なのに助けようとした奴に台無しにされて自滅して、俺完全に痛い人じゃん！

ていうか元々お前らがビリビリをナンパしてたのが原因じゃねーか！

「あと文句ならあるよ！女の子1人にこんな大勢で、恥ずかしくねーのか！それにこいつを良く見てろよ！確かに見た目は可愛いし、制服からお嬢様学校の生徒である事が分かる。でもまだガキだろ！」

カチン

なんか変な擬音が聴こえた気がするが気にしても仕方ない、スルーだ。今はこいつらを諦めさせ無ければ。

「お前らも見ただろ、このガサツな態度に口調、まだ反抗期も抜けてねー。そんなガキだぞ？俺はな、お前らのような群れなきゃガキ1人相手にできないズルい奴らは見てて不愉快だしムカつくんだ

よ！」

「…私が一番ムカつくのは…」

俺が言い終わったあとにそんなつぶやきが聴こえた。

今まで話してて気がつかなかったが、不良の何名かが俺とは全然違う方を見てる。それになんかバチバチ鳴ってるのが聴こえた。

俺はつぶやきが聴こえた方であり、不良達が見てる方であり、バチバチ鳴ってる方を見る。

そこには能力である電気を蒼白くほとばしらせる御坂がいた…

「（やばっ？）」

「お前だ——！！！！！！！！！！」

咄嗟に右手を前に突き出す。次の瞬間、御坂を中心に電気が広範圏に発せられた。

幻想殺しの力により俺が電気を食らう事はなかった。だが周りの不良はそうはいかなかったようで、「あばばばばば！」とか言葉を漏らし、最終的には黒焦げになって倒れた。

…ていうか俺、学園都市に来て始めて力を使っただけ。

御坂は能力を使った事による結果が、俺が立っているという予想と違う事実に驚いてる。

「…あんだ、なんで私の電撃が効いてないのよ？どんな能力を使ったの？」

「な、何でなんでしょう？それにワタクシは無能力者（レベル0）ですよ？う、運が良かっただけじゃないか？」

おい俺、よくそんな嘘がつけたな。

「運が良かったんじゃないか？」だって？運なんて俺とは無縁の物なのにな…自分で言つて悲しくなつて来た。

「そう…あくまで白を切るつもりね？まあ別にいいわ…」

「（よ、よかった…これで帰れる。）」

そう思った。

じゃあ、大丈夫そうだし俺はこれで…そんな風に伝えようとした…が、そこで見えてしまった。

御坂の好奇心たつぷりな表情と、口が開いていくのが…

おい、やめてくれ。それ以上何も言うな。その先には良い事なんてきつと何も無い…だからお願い！何も言わないで…！

「力尽くであばいてやるんだから！」

「どうしてこうなった？」

俺はそう叫ぶと全力疾走で駆け出す。

「あ、こらー！」

それを見て慌てて御坂も走って追いかけてくる。

必死に逃げ回る普通の男子高校生と、それを電気を出しながら追いかけるお嬢様学校の女子中学生。傍目から見たらなんとシニールな事だろうな。

だが他人の目など気にしていられるか！俺は暗くなった町を全力で駆け抜けて行った…

「待ちなさいよ？」

「不幸だーーーー！！！！！！」

∴
∴
∴
∴

s i d e o u t

s i d e ビリビリ

私の名前は御坂美琴。この学園都市の7人いる超能力者（レベル5）の第3位よ。

突然だけど私は今、ナンパにあっている。

別に対したことじゃないわ、こんな事しよっちゅうだし…でも、私に話しかけてくるなんてバカな連中ね…

今の私の状態を見て見ぬ振りで通り過ぎている人達いる。

別に彼らが薄情な訳じゃない…実際ここに割って入って来ても何かできる訳じゃないし、怪我をするだけ…見ず知らずの人間の為にそんな事する奴がいたとしたら、そいつはただのバカか、よっぽどのお人好しか…

「お、居たいた。すみせん連れがお世話になりました。ダメだろかってにいらなくなっ…た…ら…ま、まあ見つかったから良かったけど。じゃ、じゃあ俺達はこれで…」

どうやら、そのよっぽどのバカかお人好しが現れたみたいね。

そいつは、ツンツン髪の結構顔が整ってる男だったわ…知り合いを装って私を連れ出そうとしてるみたい。

私を見て言葉を詰まらせながら驚いてるみたいだけど、もしかして本当に私を知ってるの？でも少なくとも私は知らない。だから…

「誰あんた？」

そう言っただけだわ。

「ちょ、おまつ！空気読めよ？今の流れをどうしてそんなバツサリ切り捨ててんだよ！俺の作戦が台無しじゃねーか！」

「なんで私がそんなことしなきゃなんないのよ。それにあんたの作戦なんか知らないわよ。」

「何だデメエ？舐めた真似してんじゃねーぞ。」

「なんか文句でもあんのか？ああん？」

「うるせさいんだよお前ら？俺は今、俺の作戦を無駄にしたこいつと話してんだよ？」

私は別にあたと話してたつもりはないけどね…

「あと文句ならあるよ！女の子1人にこんな大勢で、恥ずかしくねーのか！それにこいつを良く見てろよ！確かに見た目は可愛いし、制服からお嬢様学校の生徒である事が分かる。」

「（へ、へえー…）」

これには私も感心した…人間誰だって自分かわいさを持つてる…けどこいつはそれでもこうやって割って入って来て文句を言っている。

そしてこんな時にあんな事を言うなんて…少しどぎまぎしてしまっただ。

けど…

「でもまだガキだろ！」

…自分の中でカチンって音がしたのがはっきり分かったわ。そしてこいつがよっぽどのバカだってことも分かったわ…！

「お前らも見ただろ、このガサツな態度に口調、まだ反抗期も抜けてねー。そんなガキだぞ？俺はな、お前らのような群れなきやガキ1人相手にできないズルい奴らは見てて不愉快だしム力つくんだよ！」

しかもこっちが黙ってるのをいい事にまたベラベラと…！
自分が無意識に電撃を操ってるのが分かる。

「…私が一番ムカつくのは…」

そのつぶやきに気づいたのか、こっちを見て焦った表情をしている。でも…もう遅い！

「お前だーーーー！！！！！！！！！！」

怒りと共に叫び、そこら中に電撃を打つ。あいつらが叫び声を挙げてるのか聞こえるわ。

電撃を止めると人がばたりと倒れる音がした…これで全員やったわね。

そう思い帰ろうとして気づいた…あのバカこちらに腕を構えて、無傷で立ってる事に…

辺り一面に放ったから躲せるとは思えない、こいつの能力なんだろうけど、一体どんな能力なの？

「…あんだ、なんで私の電撃が効いてないのよ？どんな能力を使ったの？」

「な、何でなんでしょうか？それにワタクシは無能力者（レベル0）ですよ？う、運が良かっただけじゃないか？」

無能力者（レベル0）？そんな見え透いた嘘、良くつけたもんね

…

「そう…あくまで白を切るつもりね？まあ別にいいわ…」

「（よ、よかった…これで帰れる。）」

…この表情、きつとよかったとか思ってるわね…けど何を安心してるのかしら？本当の地獄が始まるのに…

私は言葉を続けようと口を開く。このバカはそれに気づいて顔を青ざめさせているわね。

「力尽くであばいてやるんだから！」

「どうしてこうなった？」 あいつはそう叫んだら脱兎のごとく逃げ始めた。

「あ、こら！（は、早い？）」 なんて逃げ足の速さなの？でも、せっかく面白そうなやつを見つけたんだから、逃がさないわよ！

「待ちなさいよ？」

ほんと、この街は退屈しないわね！

関わっても面倒なだけ（後書き）

やっとして感じですね。

因みにこの時点ではまだ恋愛フラグまでいってません。
イメージでは当麻のことを調べてるうちに、だんだん気になりだしていくというのでいこうかな？なんて思っております。

最終的に自覚するのはAIMバーストの時か一通さん時ですかね？

レールガン編はあと二話挟んでからの予定です。

ギャップの差が可愛い(前書き)

無理やり感が否めなくも…

とりあえずどうぞ。

ギャップの差が可愛い

常盤台中学校には2人の超能力者（レベル5）がいる。

1人目は序列第3位の電撃使いで、超電磁砲と呼ばれる少女…御坂美琴。
みさか
みここ

エレクトロマスター

電撃使いは学園都市でもそれほど珍しい能力ではない。その電撃使いが超能力者（レベル5）で第3位となっているのは、その応用性の高さからだろう

さらに彼女は低能力者（レベル1）から超能力者（レベル5）に上がっているというのも大きい。

そして、もう一人の超能力者（レベル5）が序列第5位の精神系の能力者で心理掌握と呼ばれる少女…食蜂（しよくほう）操祈（みさき）。
メンタルアウト

第5位で同じ学校に第3位の超電磁砲がいる事から知名度は若干低いが、その能力の恐ろしさは第1位の一方通行に勝るとも劣らない。
アクセラレータ

記憶の読心・人格の洗脳・離れた相手と念話・想いの消去・意思の増幅・思考の再現・感情の移植など多種の能力を一手に引き受けて使いこなし、十徳ナイフに例えられる。

常盤台に君臨する女王だ。

メンタルアウト

その心理掌握が現実殺し兼幻想殺しに会ったらどうなるか…

食蜂操祈はどのように感じるだろうか…

side当麻

「ねえ、どこ行くのお？」

どうも、上条当麻だ。

今俺はとある少女に絡まれている。

少女の容姿は、まず中学生にしては背が高く胸が大きい。レース入りの手袋とニーハイソックスを付け、髪は腰の辺りまで伸びて、金髪に多少茶色が混じったような色をしている。可愛い顔をしているが、立ち振る舞いに大人びた感じもある。

そして服装は…常盤台中学校の制服だ。

「別にただ帰るだけだが…なんか用かミサキチ？」

「用がなきゃ話しかけちゃいけないの？」

少女の第5位の心理掌握で食蜂操折という。通称ミサキチだ。ミサキチって呼ぶのは、ミサキチが冗談でそう呼んで欲しいみたいなこと言い出し、そのまま定着してしまった。

語尾に小文字が入る喋り方をしていて、ぶっちゃけアホの子っぽい。

「いやそういうわけじゃないけど…」

「ならいいじゃない。あと別に私が当麻先輩について行ってもいいよねえ？」

そう言ったミサキチは俺の右腕を掴んで抱え込む。ってこれは流石に…

「おい、ついて来るのは良いけど…まさか家までついて来るつもりか？それに何してるんだ？周りの視線が痛いんだけど…」

「流石に途中で別れますよ。腕に関しては我慢してくださいさあい」

「はあ…ま、いいや…」

言っておくがこんな事されてるけど別に俺たちは恋人同士とか、そんな関係じゃない。いい友達だ。

ていうか、俺に恋人が出来るとは前世の生活からできない事がわかってる。

多分これはこっちをからかってるんだと思うんだけど…全く、常盤台で厄介な奴はビリビリだけでいいってのに…

それよりどうしてこうなったか説明が必要か…

あれは、今日みたいに街を歩いていた時だ…

…
…
…
…
…

5月某日、俺は当てもなく街を歩いている。なぜそんな事をしていいのかと言うと…気分だ。普段なら散歩なんかしないだろうな…

で何となく街を歩いて、これまた何となく辺りをキョロキョロしている、暗い裏路地が視界に入った。

その路地には男が5人、女の子が4人だ。

不良が溜まってるのかなら別に問題ないんだろうけど、おかしいのは、

女1人以外、全員倒れてる

という事だ。

気になったので俺も路地に入って行き…唯一立っていた少女に話しかけた。

「おい、これはどうしたんだ？」

「ん？あんた何なのお？こいつらのことなら私がやったんだけどねえ。」

「（この子がやった？見た所倒れてる奴らに外傷は無いが…）」

とそこで気づく…少女の制服が常盤台のものである事に…

「（という事は能力か？でも大抵の能力なら外傷が付いちまうと思うんだが…まあ、聞くのが早いかな…）なあ、こいつら何なんだ？能力をつかって倒したようだが、どんな能力かも聞いていいかな？」

「随分と知りたがりだねえ。でもいいよお、教えてあげる。こいつらは何処にでもいるただの不良^{ユル}でえ、なんかいちやもんつけて絡んできたから能力でチヨイチヨイとねえ。常盤台の女王って聞いたことあるでしょ？超能力者（レベル5）で心理掌握って呼ばれてるの

お…それ、私なんだよねえ。つまりこいつらは私の改造力でこうなってるわけだねえ。」

第5位の超能力者（レベル5）だったのか！これは驚いた。こんな奴だったのか…

魔術の方の原作には全然出てこなかったからわからなかった。

精神系ならに外傷がない事に納得できる。
だが気になる事がある…

「お前、こいつらが倒れるまで精神を弄ったのか？廃人になったらどうするんだ？」

「何か問題でもあるわけえ？別にこいつらがどうなったって関係ないでしょ？」

「なっ？お前、躊躇とかしないのか？」

「なんで能力を使うのに躊躇する必要があるのよお。それこれ関係ないでしょう？」

「フザケンナ！！！！！！」

「っ？」ビクッ

こいつ、自分以外の事を何とも思っていない。自分の能力で起こった事をどうでもいいだど？こんなに狂ってる奴がいるとはな…

吹寄の時以来だろうな、こんなにム力ついたのは…

「な、何を怒ってるのよお！」

「そんな事も分かんねーのか！世の中には自分の好き勝手しちゃいけないーもんがあんだよ！お前みたいに簡単に干渉出来たりしてしまう能力があるからそんな当たり前の事が分からなくなるんだ！」

そっぴいながらどんどん近づいて行く。

相手は女だが手をだしてでも教えてやらなきゃいけない事もある。

「な、何？説教のつもりなのお？それにお前なんか私の操作力で…え？あれえ？」

第5位が手に持っていたリモコンをこちらに向けて能力を使ってるみたいだが俺には幻想殺しがあるからな、精神系の能力なんか効くわけねーだろ

「どうした？早くご自慢の能力とやらで俺の精神を操ってみろよ。」

「ど、どうして効かないのよお？こ、来ないで！来ないでよお？」

第5位は能力が効かないことにパニックになっている。

そして俺から逃げる始めたが、ここは裏路地、後ろには壁しかない。

「逃げ場なんてねーよ、裏路地にいた事が運の尽きだな。」

「ごめんなさい！お願いだから許して！ヒイツ！」

俺が右手を降り挙げて殴る構えをしたのだが、第5位は耳を抑えてしゃがみ込んでしまった。

「……………」

「ツツツ」ブルブル

「……………」

「ツツツツ」ブルブル

……………やり過ぎたか？

もう尋常じゃないくらい涙目になってるし…

いくらイカれた奴だとはいえ、こんな状態の奴を殴るのは流石に無理だ。

仕方がない…そう思いまずはこいつの頭に手を乗せる。

乗せた瞬間にビクツてなった。

…さっきまでの威勢の良さ、ほんとどこ行つた。

んで、その手でそのまま頭を撫でてやると震えが止まりこちらを見上げてくる。

「え？」って思ってるのがわかるな。

「悪かった、頭に血が登つてたとはいえやり過ぎた。ごめんな。」

「……………」

「お前の能力がいかにヤバイものか教えてやりたかったんだ。お前今、俺が恐かつただろ？」

「……………」コクツ

「お前の能力は、今お前が感じたものと同じくらいの物を他人にも

植え付ける事が出来る。もしかしたらそれで取り返しのつかない事になっちまうかもしれない。他人の人生をダメにするだけじゃなく、恨み買って最悪自分の人生もダメにしてしまう可能性もあるんだからな。」

「……」

「それに友達も無くすぞ。」

「……別に友達なんていいけどお」

「そんな悲しい事いうなよ。世の中は作りたくても作れないやつだっているんだから……俺みたいにな。」

「……」

「何なら俺と友達になってくれないか？」

俺はそう言って、手を差し伸べる。

「……後悔するかもしれないよお？」

「ん？なんでだ？」

「……また同じ事を繰り返すかもしれないしい……」

「そんな時はまた教えてやるよ。」

「……我儘言って迷惑かけるかもしれないよお？」

「別に構わないよ。むしろどんとこい!」「ニッコ

微笑みながら言ってやった。

恐る恐るという感じだけど手を伸ばし、しっかりと俺の手を掴んでくれた。

…
…
…
…
…

って感じのエピソードがあつた訳だ。それからミサキチは無闇に力を使う事をやめたみたいだな…

あと、あの時倒れてた奴らは脳波が若干弱つてたみたいけど別にこれくらいなら回復するらしい。あと、弄つた精神も元に戻した。ミサキチが。

いや、説教したかいがあつたつてもんだな。やっぱ変わろうとすれば変わるもんなんだよな。

まあ、変わりすぎじゃね?とも思っけどな…

「当麻先輩、早く行くよお!」

「ちょ、引つ張んなよ!」

side out

side ミサキチ

今までの私は本当にバカで傲慢だったっておもうわあ。

私は自分に口答えした奴は私の能力で精神改造しちゃったから私が間違いに気づく事なんてなかったものねえ。

でも当麻先輩はなぜか私の能力が効かないからそれでやっと思違いに気づいたわあ。

初めて会った時の当麻先輩は本当に怖かったけどお、今じゃこの出会いは運命じゃないかなんて思ってるのよねえ。

だって、能力の効かない当麻先輩なら私の能力の一旦である操作力で万が一操る事も出来ないでしょ？

正直まだイラついたりしたら能力使っちゃいそうだし、そういう意味では最高のパートナーだと思うのお。

当麻先輩は私の事を友達と思ってるみたいだけど、私はそれで終わるつもりは無いから覚悟してねえ。

いつか貴方のハートを操つはっちゃうぞ

ギャップの差が可愛い（後書き）

ミサキチの性格はこれで良かったのでしょうか？

ミサキチも喋り方が結構特殊だったのですが、まだ楽な方かな？とか思ってたら死にそうになりました。

自分はレールガンの原作の方でミサキチを見ておらず、wiki頼りでした。だからキャラが激しく不安です。

ストックはあるのですが、まだまだ数が少ないので増やしながらの投稿となります。

それでも毎日頑張って投稿しようと思いますので今度もよろしくお願いします。

闇？なにそれさげぶできんの？

どこの世界に於いても必ず闇は存在する。この場合の闇というのは人には知られざるとかそういう意味でどこにあるかも分からない。

会社や企業だったり、その土地一帯だったり、教育現場にもあるかもしれない。

教育現場といえは、学園都市にも闇は存在する。それも、この世界で一番大きな闇かもしれない。

なぜこんな話を話すのかだが、上条当麻はその闇を知った人物に会う。

そして上条当麻は闇に染まった者すら助けに行くということを覚えておいて欲しい。

side 当麻

突然だがわたくし、上条当麻は不幸である。今まで語ってなかったが様々な不幸に遭遇している。

例えば雨の日、水溜りを軽いジャンプして避けたら着地点に石ころがあり滑って水溜りに上半身から浸かりにいったことがあった。さらにそのせいで携帯がオシヤカとなり買い換えるハメになったりとかあった。

なぜ俺が不幸であるという当たり前のことを今更言っているのか

と言うと、現在進行形で不幸な目に合っているからだ。しかもまた水関係。

詳細はというと、普通に学校の廊下を歩いていたらスプリングラ―が誤作動を起こしピンポイントで俺はずぶ濡れに…といった感じだ。

「相変わらずお前は意味分らないことになってるけど」

そしてそれを楽しそうに、本当に楽しそうに見ている女生徒がいる。

「…楽しそうですね先輩」

「実に楽しいよ。そしてそんな不幸で面白いお前を愛おしく思うけど」

彼女の名前は雲川芹亜^{くもかわ せりあ}という。俺の先輩だ。

容姿は黒い髪を肩まで伸ばし赤いカチューシャで前髪を後ろにしている。美人で巨乳であり、その胸はこの学校指定の制服をこれでもかってくらい押し上げている。

「…それは嫌味ですか？冗談は休み休み言っ下さいよ」

「…別に冗談ではないんだけど（ボソ）…それよりお前の不幸はどういう理屈なんだろうな。詳しく調べてみたらまた面白い法則でも見つかるかもしれんけどな」

俺がジト目で言っても何も変化がないし、それどころか更に面白

さを追求しようと検査まで提案するとは…もう呆れるしかない。

てか最初に何言っただ？小さすぎて聞こえなかった。

「ほんつつつとうに楽しそうですね？憎たらしいくらいに…」

「ふふ、ほんつつつとうに楽しいよ。この学校はいろんな刺激に溢れてるから」

せめてもの意思返しのつもりで言っただけ言葉も軽く流されてしまう。そして最後に意味深そうな事をつぶやいていた。それが何となく怪しい雰囲気を出している。

原作でどんな人だったか知っていたため前あった時にこの人に言っただけがある、「危険な目に遭ったらいつでも言ってください」って…

正確には違った気がするけどそれに近いことを言っただけだ。

そもそもこの人との出会いは、向こうがいきなり話しかけて来たのだ。

なんでも「お前が面白いから気に入った」とかなんとからしい。

「はあ…（全く、俺は過去も未来もこの人に振り回され続けるんだろうな）」

俺はため息を吐くしかなかった。

side out

私は少なからずこの学園都市の闇と関わっている。統括理事の貝^{かい}積^{つみ}継^{とし}敏^{つく}のブレインをやっているんだけど。

私の仕事は考えるだけだけど、たまに指示を出したりもする。そしてこれが楽しいんだけどな。刺激に溢れているから。

私は今学校の授業を受けているんだけど、これがつまらないことこの上ない。

外では別のクラスが体育でサッカーをしていたから何となくそっちを見ている。つまらない授業よりはよっぽど有意義だと思ったからんだけど。

ある男子生徒が視界に入った。その男子生徒はツンツン髪でほんの少し気だるげな雰囲気をしているけど、授業は真面目にやっているみたいだけど。

その男子生徒は運動神経がいいのかグラウンドの中央辺りからボールをパスされるとドリブルで何人か敵を躲してあっという間にゴール周辺にまで持って行ってしまった。

その男子生徒をしばらく観察していて面白いと思ったんだけど。別に運動神経が良さそうだったからというわけではないんだけど。

別の生徒が高く蹴り上げたボールがイレギュラーなバウンドをしてその生徒に当たった。

「こぶっ？」とか言ってると思うけど。

でも別にそれくらいならよくある事なのかもしれないんだけど…それが繰り返されること10回。

ゴールポストで跳ね返ったボールが当たる事3回。

フリーキックがその生徒に直撃する事2回。

誰かがとりあえずという感じに思い切り蹴ったボールが直撃する事32回。

不幸にも程があると思うんだけど。

その不幸さが気に入ったから、その生徒を見つけ出して話しかけてみたのだけど。

「ちょっといいか？」

「ん？あなたなんですか？」

「私は雲川芹亜っていうんだけど。一応お前の先輩だけど。体育を見てて思ったんだけどお前は随分と面白いな。何なんだその不幸さは」

「…確かに俺は不幸にだと思えますけど、それを面白いとか言われたのは始めてですね」

「そう気を落とすな。それより私は名乗ったのだからお前の名前を効かせてくれるといいんだけど」

「…俺は上条当麻っていいいます」

「上条当麻か…（確か幻想殺しの名前がそんなだった気がするけど

…)

…よし覚えた。所で上条、私は流石にお前の不幸を不憫に思ったんだけど。最初は興味だけだったんだけど、お前の不幸の相談に乗ってやろうと思ってな。何かあったら言ってくれて構わないけど」

「…先輩って結構いい人なんですね」

「私自身はそうとは思わないけど。あと私は刺激ある生活が好きなんだけど、一度お前の一日の不幸を観察させてくれないか？」

「俺のさっきの言葉は忘れて下さい」

不幸を抜きにしてもなかなか面白そうな奴だったけど…ふふ、これから楽しくなりそうだけど。

「まあ用というのはそれだけだけど、時間を取らせて悪かったな。また会おう」

「ちょっと待ってください。」

私が立ち去ろうとした時に向こうから話しかけて来た。なんなのだろうな。

「どうした？早速相談があるというのなら聞くのだけど」

「先輩ってなにか危ないことやってませんよね」

これには危つく表情に出しそうになったけど、なんとか持ち堪えた。

急に何を言い出すのだろうか、私が闇に関わっていると知っていると

は思わないんだけど。

「…なんでそう思ったんだ。」

「いや、なんていうか…雰囲気ですかね。怪しいというか何というか、そんな感じがしたんですけど。」

雰囲気って、どんなのだから気になるんだけど。

「もし本当に危険なことになったら言ってお下さい。先輩が相談に乗ってくれるのはわかったんで俺も先輩の相談に乗ります。その時はいつでも助けに行きますから。」ニコッ

「…／／」

こいつはなんていう殺人的な笑顔をするんだ。思わず顔をそらしてしまっただけだ。

よく顔を見てみたらなかなかカッコいい顔をしているな。
不幸で面白くて顔も良い、結構いいかもしれないんだけど。

「あの、どうかしました？」

「…いや、なんでもない」

こいつはもしかしたら鈍感かもしれんな。でも、それはそれで面白そうだけど。

「それじゃあ今度こそ私は行くけど。機会があったらその時は頼らせてもらっけどね。」

「ええ、待ってますよ。」

それで私達は別れたのだけど、上条が行った方向からなんか聞こえるんだけど。

「カミヤん！さっきの女のひとは誰なんだにゃー！」

「おのれはまたフラグ立てたんかいな！これは一度O・H A・N A・S H I せんとあかん！」

「てなわけで吹寄さ〜ん！カミヤんがまたフラグ立てたんだぜい！」

「何ですって！上条当麻、貴様はまた性懲りもなく次から次へと！」

「ちょ！何だよお前らフラグなんか立ってねーっつの！だから吹寄さん、その高く振り上げた右腕は俺には降ろさないでこふあっ？」

…ほんと、これから面白くなりそうなんだ。

上条が生きていたらの話だけど。

闇？なにそれさげぶできんの？（後書き）

ようやく次でレールガンの原作に入る事が出来ます。

今回については特にありません

今後もしよろしくお願いします。

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい（前書き）

やっとここまで来た~~~~？

あと、今回ちよつとくどいくらい同じ単語を使います。
不快に感じるかもしれません。

先に謝っておきます。

申し訳ございません。

それと誰が喋ってるのかわかりずらいかもしれません。
要望があつたら分かるように編集しようと思います

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい

人の繋がりは絶える事はない。

友は友を呼びその友は新たな友を…という様に連鎖していくものだと思う。

上条当麻には出会いが毎日毎日出会いが絶えない。不幸スキルも合わさって普通よりもすごい事になっている。

そして今回、また新たな出会いをする。1人を通して3人と…

その出会いは大いにこれから影響してくるだろう。

side 当麻

初夏の日差しうつとおしく外に出るのが面倒になって来た今日の頃、面倒になってると言ったにも関わらず俺は外を歩いている。学校の帰りだからだ…

時間帯は真昼間であり太陽が

俺の時間キターー！
じだい

とばかりに猛っている。

誰かが言ってたな…
ニート太陽と言えど毎日見ているとありがたみが無くなるって。

今ばかりはそう思うな。

今日は学校があつたのになぜ真昼間の時間帯を歩いているのかと
いうと、能力診断により帰りが早くなっているためだ。
システムスキャン

因みに結果は言わずもがな…無能力者（レベル0）だ。

現実殺しもあるのに、何でだろうな？やっぱ幻想殺しと同じ無
効化系統だからかな？

それとも転生の時の認識の仕方ですうな…

つか能力診断システムスキャンなんて定期的にやって変わるもんなんだろうか
…能力の強さなんて、そうそう変わる物じゃ無いと思うんだけどな。

あ、話を戻すけど先程から面倒だと言っていてやる気が根こそぎ
奪われてる今この瞬間、これまた面倒な奴に遭遇してしまった。

「あ、あんた…また会ったわね！今度こそちゃんと勝負しなさい！」

「うるせーってのビリビリ。俺は心の中で大自然に文句言ってる忙
しいんだよ」

ああ、これ絶対不幸スキルが発動してるって…はあ、不幸だ。

「それに勝負って言うのはいいが、見た感じ連れがいるんじゃない
のか？」

「くっ、そうだった…！」

そしてこの会話でわかったと思うが相手はビリビリ一人じゃありま
せん。他に3人女の子がいます。

「あのお姉様、こちらの殿方はいったい誰なんです？」

「それに御坂さんの事をビリビリって呼んでませんでした？」

「もしかして2人はそういう関係なんですか？」

「まあ？お姉様はわたくしというものがありませんからこの殿方とそんな関係に？いけません、いけませんわお姉様！」

「な？なに言ってるのよこのバカ！そんな訳ないじゃない！そつちの2人も勘違いしないでね！」

ビリビリが顔を赤くしながら焦って否定してるな。

今の会話は上から順に

女1↓女2↓女3↓女1↓ビリビリ

という順番だ。

女1は常盤台の制服を着ていて茶髪をツインテールにしている小柄な少女。

女2はこの制服だかちょっと分からないけど黒髪のショートで最大の特徴は頭に花が大量に付けて…いや、生えている様に見える。

女3は女2と同じ制服を着ていて黒髪のロングだ。白い花のヘアピンを付けててこの御坂以外の少女達の中で一番背が高い。

読者の皆さまにはもうわかっていただけてると思う。まあ、メタ発言はもうやめておこう。

好き勝手な事言われない内に会話に参戦しなくては…

「あゝ、俺は御坂の事をビリビリって呼んでるけど別に付き合ってるとかそんな関係じゃないから、勘違いするなよ?」

「あら、そうでした?それならそうとお姉様も早く行ってくださいれば良かったのに…」

「私は言おうとしたわよ!あんたが勝手に暴走したんじゃない!」

「それじゃあこの人は誰で結局の所どんな関係なんですか?」

「こいつの名前は…上条当麻よ」

「あれ?俺ってお前に名乗った事あったっけ?」

「え?あ…そ、その、えっと…」

こいつ、まさかとは思うが…

「お前もしかしてデータバンクにハック?そ、それよりもこいつとの関係だったわね?」…」

流されたか…まあいい、このままじゃ話が進まないからな。今は見逃しといてやる。

そしてこのネタを盾にして…ふっ

「こいつとの関係は…何だろう?」

「加害者と被害者」

「」「へっ?」「」「なっ?」

加害者の時にビリビリを指差し、被害者の時に自分を指差す。
俺たちの関係を一言で表すとしたら、これ以上の何があるって
うんだ？

「だってそうだろ。いつも遭遇する度にビリビリビリビリ、お前を
加害者よ呼ばずに何があるってんだよ。」

いや、もしくはターミ。ーターか？そうだ、今度追いかけられた
時は『デデンデデンデ〜』っていう音楽を流しながら逃亡して
みるか。

「あんた、人聞きの悪いこと言うな！」「ビリビリ！

「うおっ？」

こいつ！人が考え事してる時に電撃飛ばして来やがった！

「ちょ、お姉様！いきなり人間に電撃を飛ばすなんて、ご自分の力
の強さを認識して下さいな！」

「うっさいわよ黒子！こいつが悪いのよ」

「み、御坂さんって結構アグレッシブなんですな…」

「そしてその超能力者（レベル5）の電撃を慣れた感じで避けるな
んて、この人もどうかしてるような？」

黒髪ロングの子、苦勞の末だよ。そう、苦勞のな…
それより俺はこいつら…というより3人に伝えたい事がある。

3人を見て、御坂を指差して一言…

「な？ビリビリで加害者だろ？」

「「「……………」」」

「な、なんなのよその視線は！それに佐天さんや初春さんまでそういう風に思ってるの？」

「だってお姉様、たった今それやって見せたではありませんの。」

「ぐっ…！」

「…え、えつとお」

「あ、あははは…」

ふっ、勝ったな…

こいつには面倒事ばかりかけられてたから気分がいいな。

俺が勝利の笑みを浮かべているとそれに気づいた御坂が余計に腹を立てて「ぐぬぬぬぬ…！」とか言っている。

ああ、本当に気分がいい！

…キャラが変わってるな、俺。

「それはそうと「良くないわよ！」…そっちの3人も自己紹介してくれないか？」

「あ、これは失礼致しました。わたくしの名前は白井黒子ですわ。お姉様の後輩で常盤台中学校に通っておりますの。」

「私の名前は初春飾利です。柵川中学校に通っていて、白井さんはジャッジメントで同じ部署に務めてます。」

「私は佐天涙子です。初春とは同じ学校でクラスメイトです。」

まあ、分かつてはいたがレールガン組のあの子達だった。

「さっきビリビリに言われたけど改めて言う、上条当麻だ。好きな様に呼んでくれ。」

こうして俺たちは自己紹介をしたんだが、なんか御坂が「なによ皆して…もう」とかいじけてる。

本音を言えばそういう所は可愛らしいんだが、いつも会う時は追いかけるから、それを全く感じさせないな。

「所でこれから私達、ゲーセンに行こうって話になったんですけど…上条もどうですか？」

「さ、佐天さん？」

「え？いいのか？」

「別にわたくしは構いませんけど…お姉様のお知り合いですし、何よりお姉様が迷惑を掛けている事ですのでせめてものお詫びのつもりです。」

「黒子に初春さんまで…はあ、分かったわよ。あんたも来て良いわよ。」

「いや、でも…女の子達の中に男1人というのもなんか…」

「別にいいじゃないですか。それに、私たちみたいな可愛い子達に囲まれてるんですから男としては本望じゃないですか？」

「佐天さん、可愛いって自分で言いますか？」

「いや、確かにお前達は可愛い方だと思うが、それが逆に悩ませるっていうか…」

「わかるだろ？可愛いすぎるとか綺麗すぎるとかって、逆に近寄り難いってというのが。」

「」「」「……」「」「」

「ん？どうしたんだ急に黙って」

心境を語ってたらなんか視線を感じた。4人が4人ともこっちを見てた…どうしたんだ？

「いや、なんていうか…ねえ」

「そういう事を恥ずかし気もなく言われますと…」

「どう反応したらいいのか困りますよね」

「ていうか私、からかったつもりだったんですけど、こっちが恥ずかしくなって来ましたよ」

「?…俺はただ本当の事を言っただけなんだが…可愛いと言われたら別に誇ってもいいんじゃないか?」

「「「「……………／／」」」」

なんか今度は赤くなつて俯いてしまった。
赤くなつてるのは…暑くて火照つてるからか?

「そ、それより移動しない?」

「そ、そうですわね。こんな炎天下の中で留まって居られませんわ」

「そ、それがいいですよ。そうしましょう」

「え、えつと目的地はゲーセンでしたっけ?それじゃあ行きますか」

「?ああ、わかった。」

固まつたと思ったら今度は焦り出したり、忙しい奴等だな。
つと、考え事してたら置いて行かれる。

俺は早足でついて行くのだった。

s i d e o u t

s i d e 御坂

今日は能力診断システムスキャンの後に黒子の友達で私のファンだっという子と会

う事になった。

ファミレスで待っていたんだけど来たのは2人だったわ。どうやら黒子の友達とそのクラスメイト見たいね。

「は、初めまして。初春飾利…です」

「どうもー、初春のクラスメイトの佐天涙子です。なんだか知らないけどついて来ちゃいましたー。因みに能力値は無能力者（レベル0）です。」

「初春さんに佐天さん…」

私は御坂美琴、よろしく。」

佐天さんは自分のレベルにコンプレックスがあるみたいだけど、レベルなんて関係ない。

軽く自己紹介を済ませた所で私がゲーセンに行こうと提案し、いざ出発しようとした所で…あいつが現れた。

「あ、あんた…また会ったわね！今度こそちゃんと勝負しなさい！」

「うるせーってのビリビリ。俺は心の中で大自然に文句言ってる忙しいんだよ」

相変わらずわけの分からない事言ってるけど…上条当麻だったわね、データバンクをハッキングしたから覚えてるわ。

一番最初に会った時にこいつは自分の事を無能力者（レベル0）とか言ってたけど、その時はもちろん嘘だと思った。

でもデータバンクで確認したら本当にレベル0だったわ。

あり得ない。だったらどうして私の電撃が効かないのか疑問だったけど結局分らず終い。^{しま}どうしようもなかった。

考えれば考える程気になっていくし、四六時中あいつの事ばかり気にしてて…ってこれじゃああいつが好きみたいじゃない！

でも気になってるのは事実だし…いつその事聞いてみるか…って思ってる時にタイミング良く現れるし、全く持って不幸よね？

それに諦めて聞くなんて私らしくない。やっぱり闘って勝って聞き出さなくちゃね。

でも今はあいつに言われた通り連れが居るし…

こんな近くに居るのに諦めるしか無いなんて…はあ…

そんな思いとは裏腹に話がどんどん進んでいく。

こいつとの関係を聞かれたり名前を聞かれたり…

あいつから名前を直接聞いたことは無かったのに名前を答えちゃったりして危うく黒子達にハッキングがばれそうになった時は焦ったわ。

でもこいつにはバレてるみたいね。なんか意味あり気な視線を向けられたし、後で口封じを考えなければ…

で、なんだかんだでこいつがゲーセンについて来るって話になっていて、私は渋ったけど他の黒子達はOKしちゃって断るに断れなくって、結局私が折れた。

でもこいつは全員からの了解が出たのにまだ渋ってる。

そこで佐天さんが…

「別にいいじゃないですか。それに、私たちみたいな可愛い子達に囲まれてるんですから男としては本望じゃないですか？」

…って言った。「冗談で言ったのはなんとなく分かったけど、それに対してこいつは…

「いや、確かにお前達は可愛い方だと思うが、それが逆に悩ませるっていうか…」

…なんで恥ずかし気も無くそんな事が言えるのよ！ほら、皆固まってるじゃない！

「？…俺はただ本当の事を言っただけなんだが…可愛いと言われたら別に誇ってもいいんじゃないか？」

…多分私は赤面してると思うわ。皆も顔赤いし…

こいつはなんで追い打ちを掛けるみたいに…！

だ、ダメだわ、このままだとあいつにペースを崩される。

「そ、それより移動しない？」

私の提案に皆はすぐ乗ってくれたわ。すぐに移動できた。皆も考えてる事は同じみたいね。

ゲーセンに向かって歩き出したんだけど移動してる最中に黒子が話し掛けて来たわ。

「お姉様、あの殿方はいったい何者なのですか？あんなくさい台詞をスラスラ言うなんて、どうかしてますの」

「私だって知らなかったわよ。あんな奴だったなんて」

「…お姉様ってあの殿方の事をどの程度知ってるのですか？まさか追い回してただけで全然知らないなんて事はありませんわよね」

「…」

そつえば私、あいつの事なんて全然知らなかった。

知ってる事といえば能力値とか通ってる学校とか、バンクで見れる程度のことだけ。

あいつって何者なんだろう？

「その沈黙は凶星と見て間違いありませんわね。ただ追い回してただけだなんて、これじゃあビリビリなんて呼ばれても仕方ありませんの。」

「ぐっ…うっさいわね」

…やっぱり一度聞いてみた方がいいのかもしれない…

side out

side 佐天

私達はゲーセンに向かって移動している。

私は常盤台中学校の超能力者（レベル5）と聞いて、どうせ能力を笠に着た上から目線のいけ好かない奴だと思っていた。

しかし実際あってみてどうだろう。私が無能力者（レベル0）だつてことを言っても全然気にした様子は無い。それに…

「なんかさ…全然お嬢様っぽくくない？」

「上から目線でもないですね」

予想と全然違ったためこちらの調子が崩れてしまった。

さっきの会話で御坂さんを皆が弄つてた時もツツコミ入れたりいじけたり、どう見ても普通の中学生だった。

そういえば御坂さんの知り合いっぽいこの上条当麻って人…

「ねえ初春、上条さんって御坂の知り合いみたいだけど、普段はどんな人なんだろう」

「御坂さんと知り合いなんですから、すごい人かもしれないですよ
ね」

「だよね、分かった事といえば結構天然かもしれないって事ぐらい」

「佐天さんの冗談にも本気で返事してるみたいでしたし…ちょっと恥ずかしくなっちゃいました」

「それを言ったら私の方が恥ずかしいって」

私たちの所に突然現れて、御坂しんに勝負を挑まれてた上条さん。この人もまだ分からない事ばかりだ。御坂さんと知り合いなんだからそれなりの名門校に通ってると思うんだけど…

「御坂さんの知り合いだし、やっぱりレベルも高いのかな？」

「可能性は十分ありますよね。それに御坂にちよくちよく勝負を挑まれてるみたいな節がありますけど、直接勝負してないにしても御坂さんから逃げ回ってるみたいですから結構能力も強い…筈なんですけど…」

「強い能力を持ってるなら噂くらいにはなってるよね。ジャッジメントでは名前は聞いた事無い？」

「少なくとも私はありませんよ。白井さんはどうか分かりませんが…」

上条当麻なんて名前、今まで聞いた事もない。ジャッジメントの初春にも分からないとなると、直接聞いてみるしかないか…

「あの、上条さんってレベルはいくつなんですか？」

side out

side 当麻

「あの、上条さんってレベルはいくつなんですか？」

4人がそれぞれガールズトークをしていたので俺はそれ邪魔しない様に、先ほど道端で配られてたチラシを見てみると、急に佐天に声を掛けられた。

「そうだわ！こんな時間を歩いてるんだからあんたの学校でも能力システム診断があつたんでしょ、レベルを教えなさいよ！」

「あゝもう、うるさいな。俺のレベルは0、正真正銘の無能力者だ」

「「「えっ？」」」

「…なんでそこで疑問？」

俺ってどんな風に見られてんだ？

別に無能力者なんて珍しくも無いだろ。

「いえ、だってお姉様が興味を持ったお方ですし、それなりの能力をお持ちなのかとばかり思っておりましたわ」

「私と同じだったんだ…」

「私も御坂と知り合いなら能力を持っているのかと思ってました」

「あんた嘘つくんじゃないわよ！」

「嘘ついてどうすんだよ、そうすりゃレベルが変わるのか？あと佐天もレベル0だったのか。仲間だな、仲良くしようぜ」

「え？あ、はい…」

これで無能力者同盟は完成した、やったね。

…御坂の奴、まだ納得できなてないみたいだな…

「ビリビリ、納得できないって顔してるな…でも本当に無能力者だ。」

「…なんであんたがレベル0なのよ」

「あの、レベル0でもどんな能力かぐらいは分かっていたりしていないんですか」

「ああ、診断に来た人が言うには『君は完璧な無能力者だ。普通誰しも能力はあるものだけど、君みたいに本当に能力が無いケースは逆にレアだ』って事らしいぞ」

その人ももつと言い方があるだろ。なんでそんな夢を砕く様な言い方するかな？

「疑ってるならデータベースでも確認したらどうだ？そのくらい出来るだろ」

「…そうね、後でデータベースに潜ってみますか」

「「「「……………」」」」」

「…ん？どうかした」

「お前、今口を滑らせたな。」ニヤニヤ

「へ？…あつ？」

こいつ、俺がそのネタで弄る前に自爆しやがったww
しかもジャッジメントの2人の前でww

「おい、ここに犯罪者がいるぞー！白井、初春！ジャッジメント
の出番だ！…ぷっ」

「……お姉様」

「…御坂さん」

「…えーっと」

「ち、違うわよそんなわけないじゃ無いじゃない！だから黒子、そ
の手に付ける拘束具を閉まって！初春さんも何処かに電話しようと
しないで！佐天さん、離れて行かないでこっちに戻ってきて！そし
てお前は笑うな！」

いやーおもしれーな！最高だわ！

ていうかなんか御坂が弄られキャラになってる様な…まあ原因は
俺だけだ。

それから数分かけてようやく落ち着いて来た。
そしてジャッジメントの2人は…

「…とりあえず聞かなかった事に致しますの」

「…そうですね」

「え？逮捕しないの？見逃しちゃうの？つまんね」

「あ、あんたは…！」ビキビキ

「あ、あははは…」

御坂のやつ怒りで青筋立ててるな。

デコの辺りにムカつきマークが見える気がする。流石にやりすぎた気もするので、ごめんごめんって言いながら御坂の頭をクシャクシャと撫でてやる。

「なっ？」とか言ってるけど気にしない。

「…なんなのよ、もう／＼」

「そ、それよりさっきから上条さんはなんのチラシを見てるんですか？」

「ん？これか？なんか新しく出来たクレープ屋の宣伝だな。お前らも見るか？」

そうやってチラシを全員に見えるように突き出してやる。

「えーっとなになに？『クレープハウスらぶるん』」

「第7学区ふれあい広場にてNEW OPENですの」

「先着100名様にゲコ太マスコットプレゼントって書いてありますね」

「なにこのやつすいキャラ。今時こんなのに食いつく人なんて「な！ゲコ太？」って、え？」

「み、御坂さん？」

「あら？お姉様はこのマスコットに興味がお有りで？」

「な、なに言ってるのよ！わ、私は別にゲコ太なんか…だってカエルよ？両生類よ？どこの世界にこんな物もらって喜ぶ女の子がい」
「あつ…」「…？」

なんか2人が見つけたのでそちら…というより御坂のカバンに目を向けるとそこには…カエルのストラップがぶら下がっていた。

「……／／」

「……」

「…ぷぷぷ」

「…両生類が、なんだってビリビリ？」「ニヤニヤ

御坂は顔を赤くして、初春と佐天は呆然としている。白井は吹き出していて、俺はニヤニヤしながら御坂に質問する。

「わ、笑うなら笑なさいよ！／／」

「ぷっははははははは…！あつははははは「やっぱり笑うなー！（ビリビリ）」はあああー？」

危ねっ！こいつ笑えとか言ったから笑ったのに、笑ったら笑ったで電撃飛ばして来やがった！何だってんだ…

「なによ！私がゲコ太が好きじゃ可笑しいっていうの？」

「へ？別に可笑しくないだろ？」

「「「え？」「」」

「じゃあなんで笑ったのよ！」

「…ああ、俺は盛大に自爆したお前を笑ったんだよ。別にカエル好きなのは笑ってないよ。」

どうやらこいつは勘違いしてるらしいな。

「いいか？俺は人の趣味なんてバカにしたりしないよ。それはその人の個性だし、むしろ尊重してやるべき事だ。」

「「「「……」「」」」

「好きなことがあるっていうのはいい事だ。誇っていいと思うぞ。まあ、もし他の奴からバカにされたんだったら俺はお前を認めてやるよ。そしてバカにした奴を俺がバカにしに行つてやる。だからお前は気にするな、カエルが好きならままでいろ」ニッコツ

そうやって微笑みながら頭を撫でてやる。

これでまた機嫌が治ってくればいいんだが…

「…あ、ありがとう／＼／」

「…なんか、凄いですね」

「へ？初春、何がだ？こんなの別に普通だろ？」

なんにも凄い事なんて無いと思うんだけど…？
少なくとも俺はそう思ってる。

「それが普通なんて言える事が凄いつて言ってるんですの」

「ん？そんなもんか？」

「そうですよ。私にはそんな事言えませんが」

どうやらそんなもんらしい。俺にはよく分からないな。

「あ、そうだ。お前らも何かあったら言えよ？特に佐天。お前は無能力者だからって理由でバカにされそうだし…まあ、同じ無能力者の俺が言ってもつっ—のもあるけどな」

「上条さん…」

「やっぱり凄いですね」

「まあ来るかはわかりませんが、その時は頼りにさせて頂きますの」

「おう！」「ニッコ」

「」「／／」「」

ん？なんかまた赤くなってるな…やっぱ暑いからか？

「んで、何時の間にか立ち止まってたけどそろそろ移動するか。ゲ
ーセンのつもりだったけど、クレープ屋に変更でいいか？早くしな
いと無くなるしな、ゲコ太」

「え、ええ。お姉様のためですし／／」

「わ、私も別にそれでいいです／／」

「あ、あの…私も大丈夫です／／」

「み、皆…ありがとう／／」

「それじゃあ出発しますか」

俺たちは止まってた足を再び動かし出した。
まだあるといいけどな…

「…お姉様、本当になんですのこのお方は（ヒソヒソ）」

「そ、そんなこと私に言わないでよ（ヒソヒソ）」

「でも一応御坂さんのお知り合いと言っ事ですし（ヒソヒソ）」

「この中じゃ御坂さんが一番知ってる筈なんですから（ヒソヒソ）」

「うっ…でも本当によく分からないし…（ヒソヒソ）」

「はあ…お姉様、そのバトルマニアは治していただきませんか（ヒソヒソ）」

「な、なによバトルマニアって！（ヒソヒソ）」

「まあまあ、その辺にしときましょうよ（ヒソヒソ）」

「そうですよ。話が進みません（ヒソヒソ）」

「…まあ、それもそうですわね。それであのお方がどうしてあのようなくっさい台詞を言えるのかと言っ事ですが…（ヒソヒソ）」

「私もあんな一面があるなんて初めて知ったわ（ヒソヒソ）」

「あれ、絶対なんの事だか分かってませんよね（ヒソヒソ）」

「きっと上条さんは回りから鈍感って言われてるに違いありません（ヒソヒソ）」

「もしかしたら、もう手遅れになってる子がいるんじゃない？（ヒソヒソ）」

「「「あ〜……」」」

…なんか言ってるがきつと男には聞かれたく無い事なんだろうな。
気にしない事にしよう。

友は友を呼ぶ。別に呼ばなくてもいい（後書き）

次回続きになります。

ストックが作れませんでした。

あと明日から学校が始まってしまっているので更新が余計に遅くなってしまいかもかもしれません。

それでも近いうちに投稿できる様頑張りたいと思います。

今後もしよろしくお願いします。

フラグ立ちすぎ警報に注意（前書き）

支離滅裂になつてゐる可能性があります。

申し訳ありません。

フラグ立ちすぎ警報に注意

side 当麻

あれから俺達はクレープ屋のある第7学区のふれあい広場まで来ていた。

だが…

「うわぁ…すごい人…」

そう、佐天の言う通りものすごい量の人が居るのだ。でもそのほとんどが小学校の低学年くらいの子供達ばかりだ。

「なんでこんなにちっちゃい子が…」

近くでバスガイドっぽい人が 声を張り上げているから、多分遠足か社会科見学なのだろう。

「どうやら遠足みたいだな」

「タイミングが悪かったみたいですねー」

「このままじゃ座れる場所があるか不安だし、先に皆でその辺のベンチを取っておいてくれないか？」

「え？皆って私達全員ですか？」

「あんたはどうすんのよ」

「俺はもちろん全員の分を買って荷物持ちだ。あ、そうだ。今回は俺の奢りだから」

「「「「え?」「」「」」

「…いいの?荷物持ちまでさせちゃって…あんたお金は大丈夫なの?」

「そ、そうですよ。流石に悪いですって」

「ああ、別にいいって。誘ってもらったのは俺なんだし、それに女の子に奢ったり荷物持ちは男の甲斐性ってやつだろ?」

そう言ってやると少し渋りながらも了解してくれた。

「でもやっぱり、貴方1人で全員分を持てますの?」

「1人くらい付いていたほうが」

「大丈夫だって、俺こう見えても結構器用なんだよ。1人で運ぶくらいどうってことないって。」

これでやっと了解してくれたのか、お願いしますと言ってベンチを取りに向かって行った。

クレープの順番もようやく回って来て、注文をしてクレープを買った。もちろんゲコ太ストラップも貰った。

ただ最後の一つだったのは危なかったな…

あいつらが座ってるベンチを見つけてそっちに向かって行く。

「買って来たぞ。」

「ありがとうございますの」

「どうも」

「ありがとうございます」

「ありがとう。あ、あとあれは？」

「ああ、ゲコ太ストラップももらって来たぞ。良かったなビリビリ、これなんと最後の一個だってよ。」

「ほんとに？良かったー。私の運も中々の物ね。あとビリビリって言うな。」

本当にな…その運を少し俺に分けて欲しいよ。

その後に黒子が御坂にクレープを分けようとしたが、御坂は黒子のトッピングの生クリームに納豆っていう組み合わせが嫌らしく逃げ回ってる。

俺だって嫌だそんなん。でも少しきになりもするな。

俺はその間に違う方の2人に話し掛けるとするか…

「よう、クレープはどうだ？」

「あ、はい。美味しいです」

「ほんとにありがとうございます。奢ってもらっちゃって」

「それはもういいって。それよりもだ、御坂に会ってどうだった？」

「御坂さんですか？そうですね、お嬢様のイメージとはちょっと違ったけど、思ったよりも親しみやすい人で良かったです」

「私は…まだちょっと分からないけど、それでもいい人だっていうのは分かりました。それに当麻さんが居なかったら一歩引いた態度で接してたと思うんで感謝してます」

「そうか、それは何よりだ。レベル5ってゆーのはな、それだけで憧れの対象にもなるが妬まれの対象にもなるんだ。特に俺みたいにレベルが低い奴らからはな…だからお前達みたいな友達はあいつに取って絶対にプラスになるから仲良くしてやってくれな…」

御坂には厄介事を持ち込まれるが別に嫌いじゃない、むしろ友達とするなら結構好きな方だと思う。

俺もレベル0だけど男の俺じゃ女の子の気持ちを理解するなんてのは無理だし、佐天と初春みたいな奴は結構貴重だよな。

「…他人のためにそこまで考えられるなんて、やっぱり凄いですね」

「分かりました、任せて下さいよ。」

「ああ、頼むぞ。」

この子達は自分のレベルが低いからってレベルが高い奴等を恨ん

「初春！アンチスキル警備員への連絡と怪我人の確認、急いでくださいな！」

「は、はい！」

白井は初春に指示を出しながら公園の柵を飛び越える。

「黒子！」

「いけませんわお姉様！…学園都市の治安維持はわたくし達ジャッジメントのお仕事。今度こそ行儀良くしててくださいな」

黒子はそう言いながらポケットから取り出したジャッジメントの腕章を付ける。

「つか御坂…」

「お前…まだ何かやらかしてたのか？」

「ち、違つわよ！私はただナンパして来たバカな連中をのしただけで…」

「それでもやらかした事には変わらないだろ」

「ぐっ…！」

俺達がそんな話を話してる間に初春はアンチスキル警備員への連絡が済んだらしい。

佐天はなんか呆然としてるな…

銀行から犯人と思われる3人組が出てきた。そしてそいつ等に立ちはだかるように黒子が進路を塞いだ。

「止まりなさい！」

side out

side 白井

銀行から爆発があつた直後、わたくしはクレープを一気に食べ、初春に指示を出して公園の柵を飛び越える。

全く、せつかくのクレープが台無しですの。

また介入しようとするお姉様を言葉で制して犯人達の前に出る。

「止まりなさい！……ジャッジメントですの。器物破損、及び強盗の現行犯で拘束します。」

「「「……」」」

「?」

こいつらどうしたんですの?こちらを見るなり固まったりして…

「「「…ふっはははははは!」」」

「なんだよこのガキw」

「ジャッジメントも人手不足かw」

…どうやらこちらを見た目で判断して油断してるようですね。
これは一つ痛い目に合わせないといけませんわね。

「おらお嬢ちゃん…とつとどつか行かねえと、怪我しちゃうぜ！」

「そういう三下の台詞は…」

犯人の1人がこちらに掴みかかって来たのでそれを避ける。

わたくしは相手の力を利用しながら、袖掴み引つ張りながら足を蹴りあげる事によって犯人は空中投げ出されます。最後に手を離して犯人は地面に背中から叩きつけられましたの。

「…死亡フラグですわよ」

「なっ？」

「デメエ！」

残った2人も驚いてますわね。

これで残りの犯人達も油断する事はなくなつたでしょう。

その証拠に犯人の1人が片手を前に突き出して来たので多分能力を使うつもりなのでしょう。

すると掌から炎が発生しましたわ。

「…今更公開しても遅せーぞ」

「パイロキネシス
（発火能力と…つたく）」

わたくしが悪態ついたのは先程倒した奴のせいですわ。

このままここに立っていては、これに怪我、最悪焼け死んでしま

いますわ。

そう思ったわたくしは道の真ん中の方へと走り出します。

「逃がすかよ…！」

発火能力の犯人はわたくしを逃がすまいと炎を放ってきますが…何を勘違いしてるのでしょうか？

「誰が…」

炎が着弾する寸前にわたくし能力である空間移動テレポートを使います。

「逃げますの？」

そして相手の目の前に転移して意表を突き、再度能力で相手の背後の頭上に転移しドロップキックを食らわせます。

能力で倒れた犯人の前に降り立ち太ももの所にある金属棒を犯人の服と地面を縫い付ける様に転移させますの。

「テ、テレポーター！」

「これ以上抵抗なさるなら、次はコレを…体内に直接テレポートさせましてよ？」

金属棒を見せびらかせながら脅す。これで無効化できたでしょうね。

「うわっ！なんだデメエ、離せよ！」

「へ？」

そういえばもう1人いた事を忘れてましたわ。

声をした方を見てみれば、連れて行かれそうになった子どもを佐天さんが必死に抑えていました。

しかも連れて行けない事に痺れを切らした犯人が佐天さんを蹴りつける寸前でしたの…

side out

side 佐天

「…凄い」

「さすが黒子」

「へえー、なかなかやるなあ」

白井さんは銀行から出てきた男の内の1人を体格差があるにも関わらず投げ飛ばしていた。

能力を使った様子も無いし、体一つでそこまで出来るなんて…そんな風に思ってたら言葉が漏れていた。

「ダメですって！いま広場から出たら！」

「でも…！」

そんな事を思ってる時、横から初春とバスガイドさんの声が聞こえた。

「どうしたの？」

私と御坂さんと上条さんの3人はもめてる2人の所に行き、御坂さんが質問した。

「男の子が1人足りないんです！」

「え？」

「こんな時に…！」

上条さんの言う通りどうしてこんな時に…

「少し前にバスに忘れ物したって言っただけ…！」

「…じゃあ、私と初春さんで「私も行きます！」…」

一般人だから黙って見てられない！

御坂さんが私を見てきたけど、私はそれに頷いて見せて覚悟を表した。

「なら俺も手伝おう。俺も黙って見てるなんて出来ないからな」

上条さんも加わって4人で探し始めた。

バスの中を確認した御坂さんもバスの回りを探してた初春も見つからないらしい。

私と上条さんも植木の中とか、隠れられそうな所を探してたんだけどやっぱり見つからない。

そんな時だった…

「あ、なんだお前！丁度いい、一緒に来い！」

声が聞こえてそちらを見れば、犯人とそれに掴まれてる子どもの姿が…

初春達は探すのに全然気づいていないみたい…

「（私だって…！）」

一般人の私でも、無能力者の私でもやれる事はある。

だから私はそっちに向かって走り出して、子どもが連れて行かない様に抱きしめる。

「うわっ！なんだデメエ、離せよ！」

「ダメー……！！！」

無我夢中で抱きしめて声をあげる。

そして犯人は子どもを諦めて私を蹴ろうとしてきた。

蹴られる時の痛みを想像して、ぎゅっと目を閉じたんだけどいつまでも痛みがやって来ない。

何？と思つて恐る恐る目を開けるとそこには…

「大丈夫か佐天？」

微笑みながら、犯人の足を左手で掴む上条さんが居た…

S i d e o u t

S i d e 当麻

犯人と佐天の声が聞こえて振り返ってみれば、犯人は脚を上げて

俺と佐天の距離は10m以上あり、普通に移動したんじゃないって考
えても間に合わない。

だから俺は…左手の力を使った。

リアルブレイカー
現実殺し。

イマジンブレイカー

俺が幻想殺しの対を願って手に入れた能力で名前も単純だ。

その力は簡単に言えば、

あらゆる物理法則を壊す能力。

まず左手を自分体にあらかじめ当てておき、佐天の方へ縮地の要
領で一気に踏み込む。

踏み込んだ直後、能力によって自分の体重だけ0にして軽くする。
だが体重だけ軽くしたのでは空気抵抗とか空気摩擦で真っ直ぐに
は進まないだろう。

だが左手は空気にも触れているので能力の限界範囲である直径2
mでの抵抗や摩擦を0にする。

速度を遅くする要因を消して、吹寄の時に使用した縮地よりもさ
らに速い速度で移動してすぐさま能力を解除。

ちょうど佐天の横まで移動した俺はブレーキをかけながら左手を
そのまま伸ばし佐天と犯人の足の間に滑りこませ足を受け止めた…

という訳だ。速さだけならまさに一瞬だったと思う。

だいぶ理論に穴があったと思うんだが、まあそこは偶然もあったんだろう。

あと早すぎると普通は思考が追いつかないが、能力もあってそこは鍛えていた。

犯人は足を掴まれたままジタバタしてるが、俺は左手で足を掴んだまま離さない。

「大丈夫か佐天？」

「か、上条さん…」

佐天を安心させる様に微笑みながら声をかける。

本当に凄い奴だ。能力の有無に関係無く、勇気を出して犯人に立ち向かうなんてな…

「「「…え？」「」」

「あのお方、どうやって…」

「な、なんだデメエ！どっから出てきた！」

「ダメレ」

それに引き換えこいつは子供を人質に取ろうとして、拳句に佐天にまで危害を加えようとして…ム力つく野郎だ。

俺は再度左手の能力を発動し重さを0にして犯人を片手で持ち上げ中釣りの状態にする。

「なっ？くそっ離しやがれ！」

「お前みてーな他人の力に利用するしか出来ねー卑怯な奴は大嫌いなんだよ！どうせこの銀行強盗だって仲間に能力者が居たからやったんじゃねーのか？さらには子供まで利用しようとして…本当の意味で弱い証拠だ！だから銀行強盗なんて狡い事もするんだ！改心して出直して来やがれ！」

「ガハッ！」

説教と共に犯人を地面に向かって叩きつける様に投げる。

俺が投げた犯人は地面にぶつかった後、そのまま3mくらい転がり停止した。痛みでうめき声を挙げている。

俺はそれを一目見ると佐天の方に振り返る。

佐天の頭をクシャクシャと撫でてやりながら褒めてやる。

「犯人に立ち向かうなんて、よく頑張ったな佐天」

「上条さん…／＼あの、助けてもらってありがとうございます／」

「ああ、どう致しまして」ニコッ

「っ／／／」

あれ？なんか真っ赤になって俯いてるな。どうしたんだ？

「あつ！」

そこで初春の声が聞こえた。

視線を辿ると先程俺が投げた犯人が車に乗り込む所だった。

「ちくしょう…このまま黙って捕まるかよ…！」

「あの野郎、まだ懲りてねーのか！」

「っ？」

俺も黒子もあいつの無効化に向かおうとする。
が…

「黒子？」

御坂が大声を張り上げる。

「ここからは私の個人的な喧嘩だから、悪いけど…手、出させてもらっわよ。…それとあんた？」

黒子は御坂の様子に「あゝ」って声を漏らし、やっちゃった？って感じになってる。

御坂は今度、俺の方を見て口を開いた。

「私もあいつにはムカついてたの…だからここは譲ってもらっわよ」
…こうなったら多分もう止まらないな…それに、あいつに見せ場

をやってもいいか。

「…わかった、思いつきやってやれ！」

「ふっ…言われなくても！」

次の瞬間犯人の乗り込んだ車が急発進して、俺たちの方に車体の向きを変える。

御坂はそれを見ながらゆっくりと

コインを構える。

そこで白井に捉えられた犯人が急に口を開いた。

「お、思い出した。ジャッジメントには捕まったが最後、身も心も踏みにじって再起不能にする最悪のテレポーターが居て…」

「誰の事ですのそれ？」

この状況からは多分、白井の事なんだろうな…

…なんか白井に一瞬睨まれたような気がしたが気づかなかった事にしよう。

「さらにはそのテレポーターの身も心も虜にする、最強のエレクトロマスターが…！」

「…そう、あの方こそが学園都市230万人の頂点。7人のレベル5の第3位…」

黒子がその言葉を言った時、御坂はコインを上弾き、犯人は車を走らせた。

コインが重力で下に落ちて御坂の指に触れた瞬間、

音速の3倍でコインが発射された。

コインはオレンジの奇跡を残し車を吹き飛ばし、車は御坂の頭上を飛び越え遥か後ろに落下した。

「…超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴お姉様ですの。常盤台中学校が誇る最強無敵の電撃姫ですの。」

「…すっ」

「凄い」

「…流石の威力だな」

レールガンの威力には賞賛しか無い。

「（…っかあの威力を俺に撃つて来る可能性があるんだよな…今後生きてられるかな、俺）」

俺に破滅の未来がよぎった…

…
…
…
…
…

その後、犯人は無事に全員逮捕。今は警備員も来て犯人達を護送中だ。

俺はその時は適当に地面に座って休んでたのだが、俺と同じ様に休んでる佐天に歩いてく御坂が見えたので、俺も同じ様に佐天に近づく。

「お手柄だったね、佐天さん。…凄くかつこ良かったよ。」

「そうだな、本当にかつこ良かったよ」

「御坂さんに…上条さん」

「姉様〜！」

「うわっ？ちょ、黒子！」

「佐天さん！お怪我はありませんでしたか？」

佐天を賞賛してる間にジャッジメントの2人も合流して来た。

「初春：大丈夫だつて、上条さんが守ってくれたから」

「あ、そうでしたね。…上条さん、佐天を守って頂いてありがとうございます
ございました」

「お礼なんて別にいいつて。当然の事をしただけだしな…」

本当に当たり前の事をしただけだ。別に褒められることじゃない

と思うけどな。

「…そうだ、初春と佐天には言っておきたい事があるんだ。少し真剣に聞いてもらえるか？ちょうど御坂に白井も居るしな…」

「？どうしたのよあんた」

「わたくし達にも聞いて欲しい事なのですか？」

「ああ、お前らはいいい例だからな…さて、初春に佐天は御坂や白井の能力を見てどう思った？」

「え？わ、私は…かつこいいと思いました」

「わ、私は凄いいと思いました」

佐天と初春という順で答えてくれた。

これから言う事は今後間違った道を進まないためのものだ。

まあ、俺もそんなにうまくは言えないけどな…

「そうだろうな。その気持ちはやっぱり憧れから来るんだと思うんだけど、これから努力して御坂や白井みたいに強い力を手に入れる事が出来たでしょう。自慢したいとかそんな気持ちも出てくるかもしれない、でもそこで能力に溺れてはダメだ。もしそうになったらさっきの犯人達の内の人だった発火能力者みたいになってしまうかもしれないからな…」

「……」

「御坂や白井は強い能力を持つてるけどそうならないのはやっぱり、

強い意識とか心があるからだと思うんだ。御坂はどう思ってるか分からないけど、白井はジャッジメントになってるから人を助けるために能力を使いたいとか、そんな気持ちがあるんじゃないかと思う。本当の強さって言うのはこの2人みたいに強い精神が有ってこそだと、少なくとも俺はそう考えてる。だからお前達も強い意識を持っ
てこれから行動して欲しいんだ。」

「…/」

「…」

「でも、佐天は犯人にも立ち向かった勇氣がある。初春白井と同じジャッジメントだし、佐天の怪我を心配したり出来る優しさがあるからな。お前達なら大丈夫だと信じてるよ。…よし、長くなっただ話はこれで終わりだ」

最後に初春と佐天の頭を…ポンポンと軽く叩いてやって話を終わらせた。

でもやっぱり俺は教えよりも説教の方が柄に合ってるよな。慣れない事をしたな…

その後俺は初春と白井の上司に当たる人からお礼を言われ、それも済むと1人で帰路に着いた。

side out

side 初春

上条当麻さん。今日始めて合ったけど、考えてる事が凄くて私には到底マネ出来ないと思います。

最初に合った時は少しだらけてて不真面目な人なのかなと思ったけど、それは大間違いだったことに気づきました。

ちゃんと雰囲気の切り替えが出来る人でした。佐天のために犯人に怒ってくれたり、私のためにも力について話をしてくれました。

真剣に話をしてくれる上条さんは結構かつこよかったなあ…って、ななな何を言ってるんですか私は！／／

でも、上条さんみたいな人がジャッジメントに居てくれたらなあ…

side out

side 佐天

上条さんが守ってくれた時は本当に嬉しかったし安心した。

しかも私のために犯人を怒ってくれて…その時の上条はちょっと怖かったけどね。でもやっぱり嬉しかった。

勇気を出した私を褒めてくれて、御坂しんも私の事をかつこいいって言ってくれて…でも上条さんのあの微笑みはちょっと反則だったかな／／

私と初春に話をしてくれる上条さんも真面目な雰囲気がまたかつこよくって…私さっきから上条さんの事ばかり考えてる。

これはちょっと、本気でヤバイかも… / / /

Side out

Side 白井

あのお方はただのたらしなのかと思っておりますわ。

でもそれは大間違いでしたの。

そう認識させらせる場面は度々ありましたの。

まず、お姉様の子供っぽいものの好きをバカにしなかったかばかりか逆に認めて差し上げたこと。

佐天さんを犯人からお守りしたところ。

力について初春達に教えて差し上げたことが主ですの。

ただ話の最中に褒められてるみたいいで少し恥ずかしくなってますわ。お姉様もそうみたいでしたし…

あそこまでの考えをお持ちですと、本当に年が近いお人なのか疑ってしまいますわ。

ただ、気になるのが佐天さんを助けた時のあの動き。何時の間に割り込んで来たのか全然わかりませんでしたわ。さらには同じ体格くらいの犯人を片手で持ち上げるだなんて…

あのお方は自分でも無能力者と言っていたはず…なのですが、別に疑ってる訳ではありませんのよ。

まだ会ったばかりとはいえ信頼のおける方だと思っておりますから。

わたくしの上司の固法先輩こふもあの方の話を聞いて興味をお持ちでしたし…

…でもやはり、一度データベースを確認した方がいいかもしれませんの。

side out

side 御坂

あいつとは偶に会った時に私が追いかけて回してあいつが逃げつつて事しかやってなかったら、今まで真面目に話をした事なんてあまり無かったわ。

そして今日一緒に行動して認識を改める事になったわ。

私の趣味を知ってもバカにしなかったし、さらにはバカにされたら俺は認めてやるだなんて…よくそんなクサイ台詞って思ったけど本音を言えば本当に嬉しかった。

真面目に話をしてくれた時はちよつとかっこいいって思ったし／＼
そういえばその時、御坂って初めて呼んでくれたような…

犯人に怒ってた時、あんな顔するんだって思ったわ。

私に追いかけて回されて嫌になってるんじゃないかって思ってたけど、本当に怒ってる時は雰囲気も違うから私はまだ嫌われてはないのね。

正直なところあいつとの関係も悪くないと思ってる、むしろ続け

ていたいとも思ってる。なんだかんだで楽しいのでしょうね。

そういえばあいつ、どうやって犯人の蹴りを止めたんだろう。

明らかに普通の速度じゃ無かったし、テレポートみたいにいきなり現れた様にしか見えなかった。

やっぱり力を隠してたのね。

これは次会った時が楽しみね。

フラグ立ちすぎ警報に注意（後書き）

とりあえず思う事は、

説教考えるのがめんどくさいです。

自分の文才の無さが嫌になってきます。

それでも頑張っ続けてこうと思っています。

次回はまだ何やるか未定です。

あと、本格的に学校が始まってしまいました。更新速度が落ちてしまします。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9247z/>

俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

2012年1月11日03時45分発行